校舎増築に伴う

巨摩廃寺遺跡第６次発掘調査報告書

2002.3

財団法人　東大阪市文化財協会

校舎増築に伴う

巨摩廃寺遺跡第６次発掘調査報告書

巨摩廃寺遺跡周辺航空写真　南から

2002.3

財団法人　東大阪市文化財協会

目次

1. はじめに 3
2. 調査の方法 3
3. 層序 5
4. 遺構と遺物 9
5. 巨摩廃寺遺跡の出土種実および木製品の種類同定 26
6. まとめ 34
7. 参考文献 35
8. 抄録 36

例言

1. 本書は、平成３年度に財団法人東大阪市文化財協会（以下協会）が、学校法人樟蔭東学園からの委託を受けて実施した、校舎増設に伴う巨摩廃寺遺跡第６次発掘調査の結果報告である。
2. 現地調査は、平成３年７月20日から平成４年３月19日まで実施した。
3. 調査は、池崎智詞が担当した。現地調査には、調査補助員として鶴田政樹・前田秀則・寺内（旧姓岩倉）三和子・荒木陽子・中谷忠稔・永村明良・丹野智之・室田都英・村上義彦・大田裕樹・甲地美香・島田淑子ほか（敬称略・順不同）が参加し、本書作成には、荒木陽子・寺内（旧姓岩倉）美和子・長谷山悦子・日野菊美・組島慎也ら（敬称略・順不同）が参加した。
4. 本書は５章をパリノ・サーヴェイ株式会社が執筆した他は池崎智詞が執筆編集した。
5. 本書の遺構写真および遺物写真の撮影は池崎が行った。
6. 調査地の基準点測量および航空写真測量は、株式会社サンヨーに委託して行った。
7. 今回の調査において、出土した種実および木製品の樹種同定は、パリノ・サーヴェイ株式会社に委託して行った。
8. 現地調査に際して、学校法人樟蔭東学園伊賀節郎理事長（当時）をはじめとする学校関係者の皆様および、株式会社竹中工務店・有限会社花田建設に御協力頂いた、記して御礼申し上げます。
9. 今回掲載した、遺構平面図・断面図のトレース作業は、すべてコンピュータ上で行った。

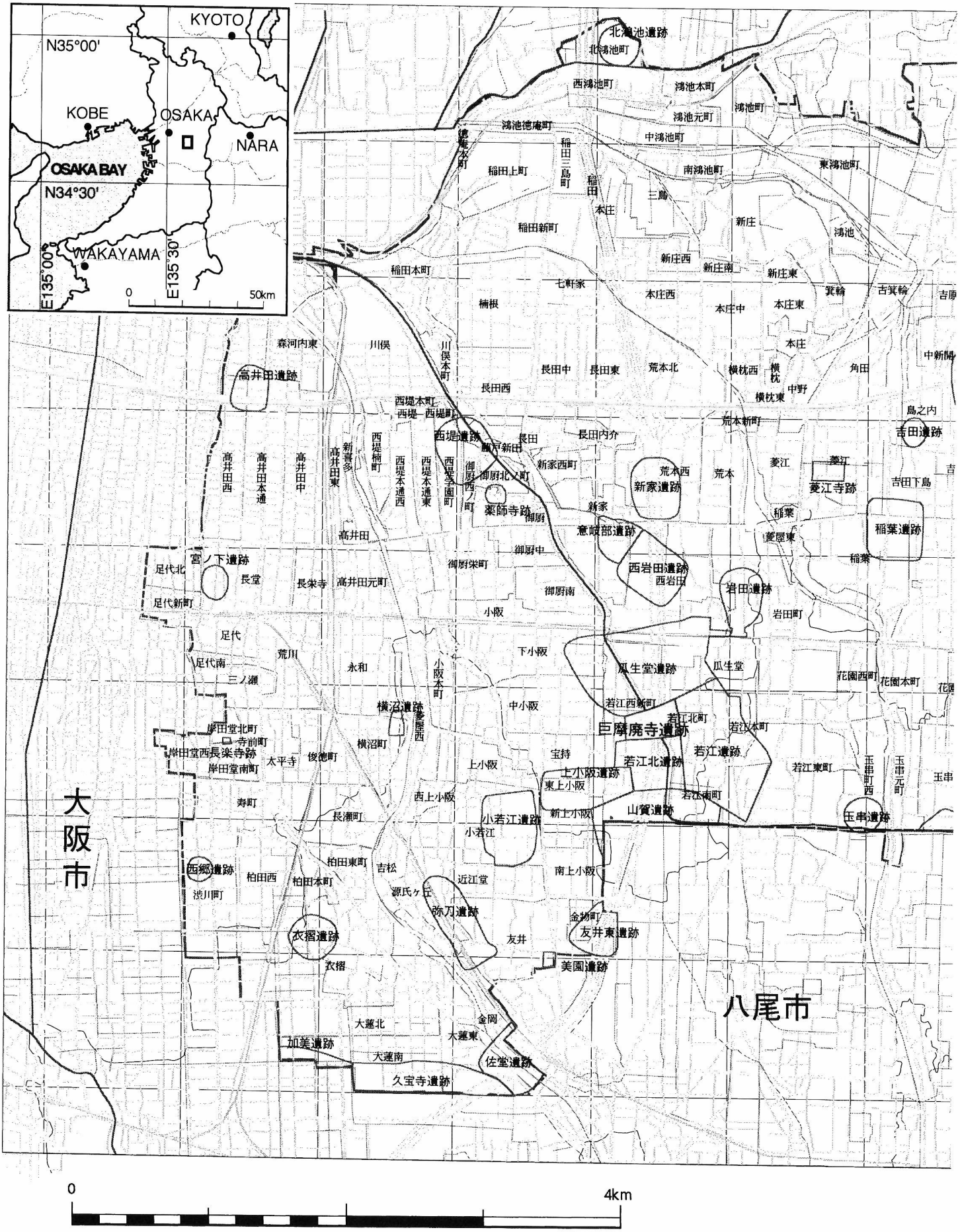


図１　巨摩廃寺遺跡周辺の遺跡分布図

1. はじめに

巨摩廃寺遺跡は、東大阪市若江西新町３丁目を中心に東西400m、南北250mに広がる、弥生時代から室町時代に至る複合遺跡である。昭和８・９に行われた耕地整理および楠根川改修工事の際、多量の土器が検出され周知された。昭和39年河内市教育委員会によって行われた発掘調査では、基壇・礎石などの建築遺構、軒丸瓦・軒平瓦、北宋銭などが出土し、『河内志』にみる「巨摩堂」跡との推測がなされた。

昭和49年に財団法人大阪府文化財調査研究センター（以下センター）の実施した試掘調査では、中世遺構面の下位に弥生時代遺構面の存在が明かになった。以後センターの調査では、遺跡範囲の広がりが確認されたほか、弥生時代中期・後期の方形周溝墓や古墳時代前期の水田、古墳時代中期の古墳、中世の井戸や土壙・溝・ピット群などが発見され、周辺の若江北遺跡・瓜生堂遺跡・山賀遺跡を結ぶ一大集落の存在が想定された。

東大阪市では、東大阪市遺跡保護調査会や財団法人東大阪市文化財協会（以下協会）などがこれまでに８回の調査を行っており、中世や弥生時代の遺構・遺物を検出している。

2. 調査の方法

今回の調査地は、近鉄奈良線八戸ノ里駅から南東へ直線距離で約1Km、主要地方道中央環状線巨摩橋の交差点北西隅に所在する、学校法人樟蔭東学園内である。地籍では東大阪市若江西新町３丁目にあたる。

図2　巨摩廃寺遺跡位置図

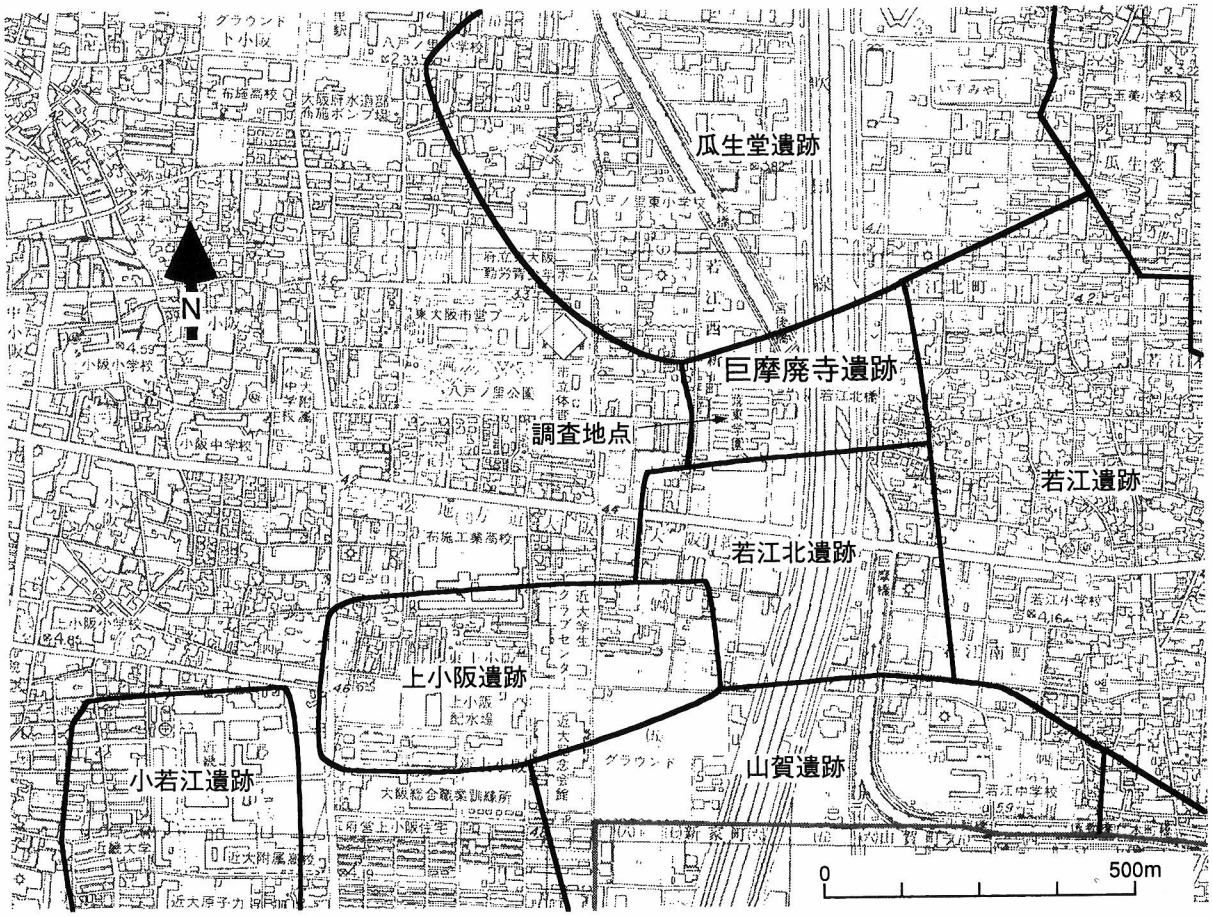


図3　トレンチ位置図

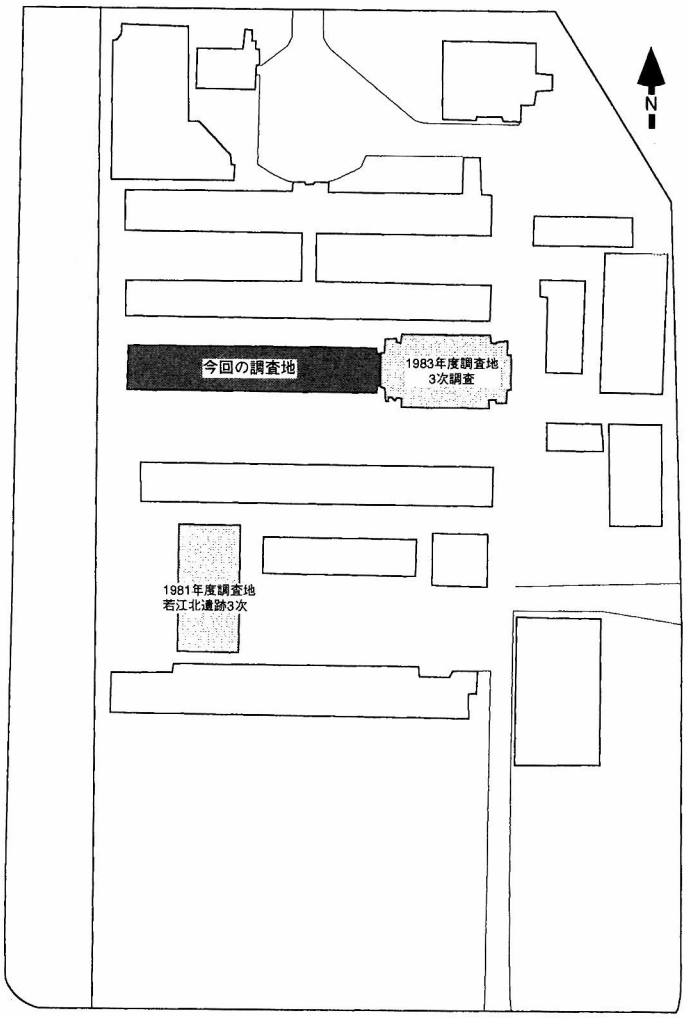
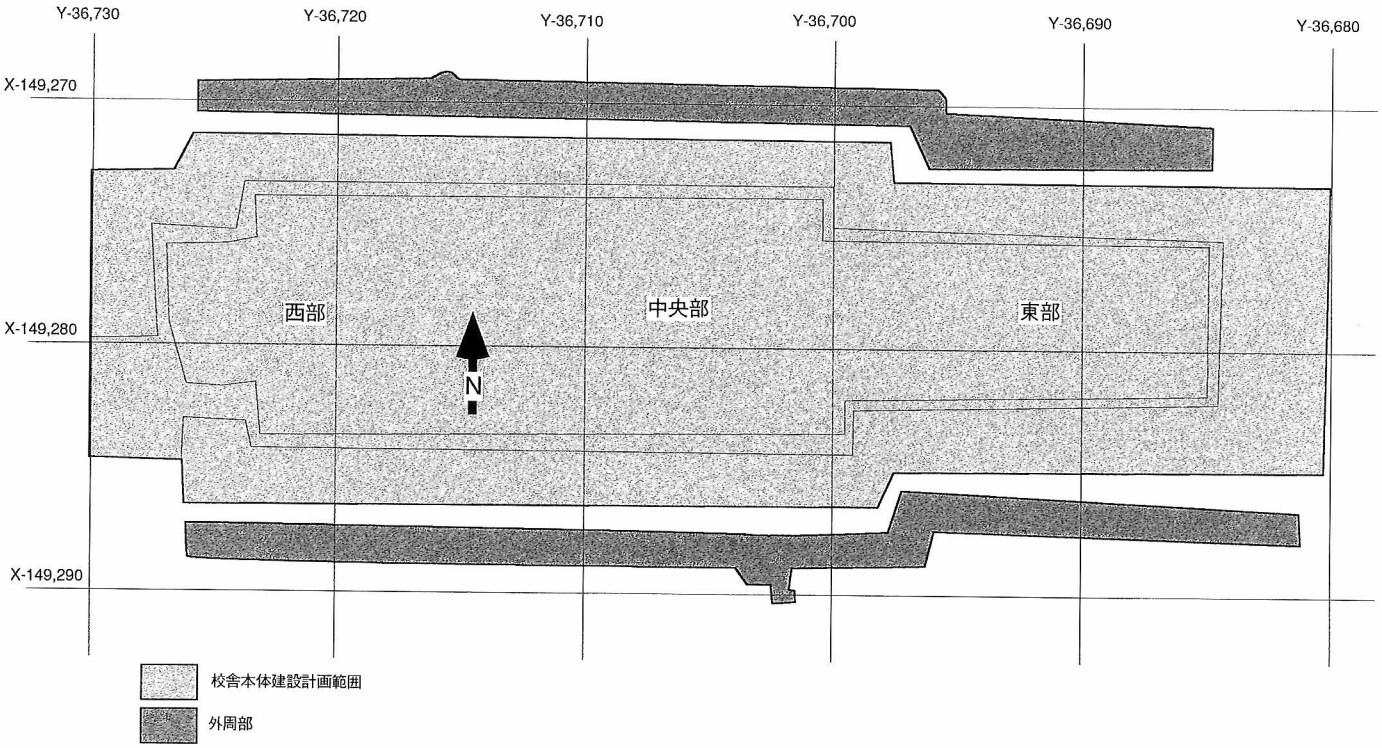


図４　調査地区割図



調査は、校舎増築予定地に815m²のトレンチを設け、最終掘削深度の現地表面下4.5mまで実施した。

現地表面から下に1mまでの部分を機械によって掘削し、以下3.5mの部分について人力によって掘削した。

3. 層序

調査地内の層序は以下の通りである。

1層　　盛土　約0.5mで北に向かって厚くなる。

2～3層　旧耕土　灰色の粘土層で東半分では2層に削られる。(近世包含層)

4層　　第1面　灰色の荒い砂の混ざったシルト層で自然河道や近世遺構を検出。

5～7層　オリーブ灰色から灰色の細砂～粘土層

8層　　第2面　褐色～にぶい黄橙色の粘土層で自然河道のほか、中世から奈良時代の遺構を検出。下層では古墳時代初初頭の土器が出土した。

9～11層 褐色～灰色の細砂～粘土層で、中央部は薄く、東西両側に向かって若干厚くなる。

12層　　第3面　暗緑灰色～暗褐色の砂質シルト層で、中央部で自然河道のほか、溝などの遺構を検出。

13～16層　オリーブ系のシルト～荒砂層で、中央部で検出した、南北にトレンチを縦断する自然河道のオーバーフローが供給源と考えられる。

17層　　第4面　暗オリーブ灰色粘土層　自然河道のほか、多数の人間や動物の踏み込みを検出。

18層　暗オリーブ灰色シルト層

19層　黒色砂混粘土層で東に向かって砂の混入が多くなる。遺物も東に向かって濃くなる。

20層　　第5面　暗緑灰色粘土層　東半部特に東端部は安定しており、溝・土壙などの遺構を検出。西半部に遺構は認められない。

21～25層　オリーブ系の砂層

26～28層　　第6面　灰色粘土層　東部に向かって厚く堆積し、21～

図5　調査前風景　東から

図6　トレンチ南壁断面図　その1

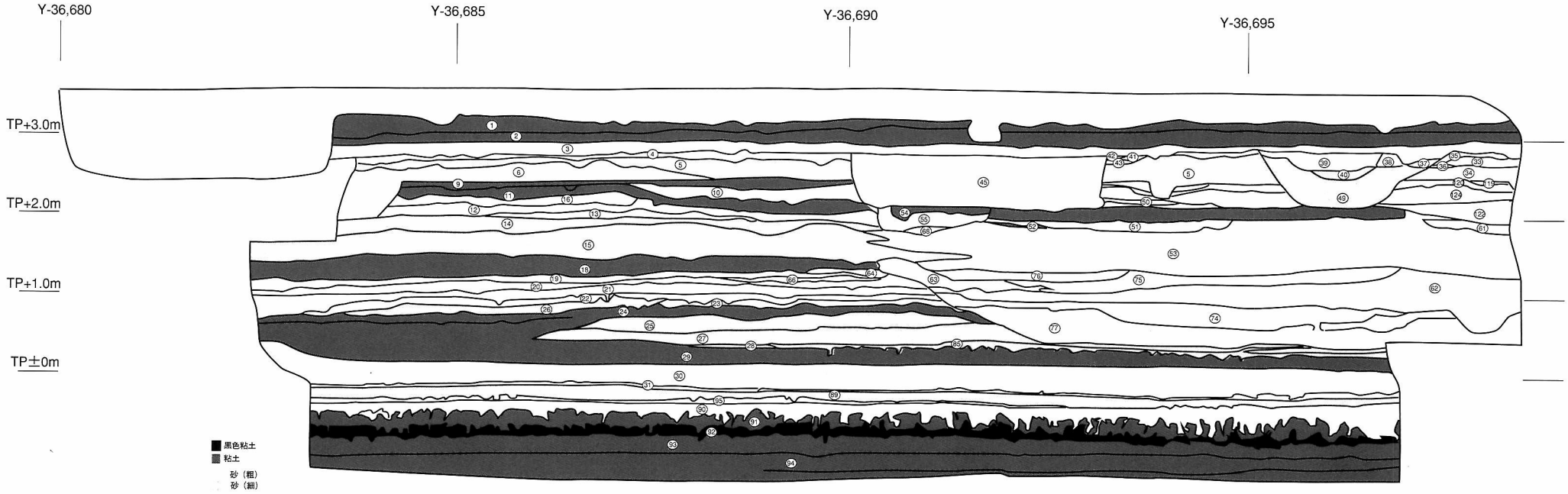


図7　トレンチ南壁断面図　その2

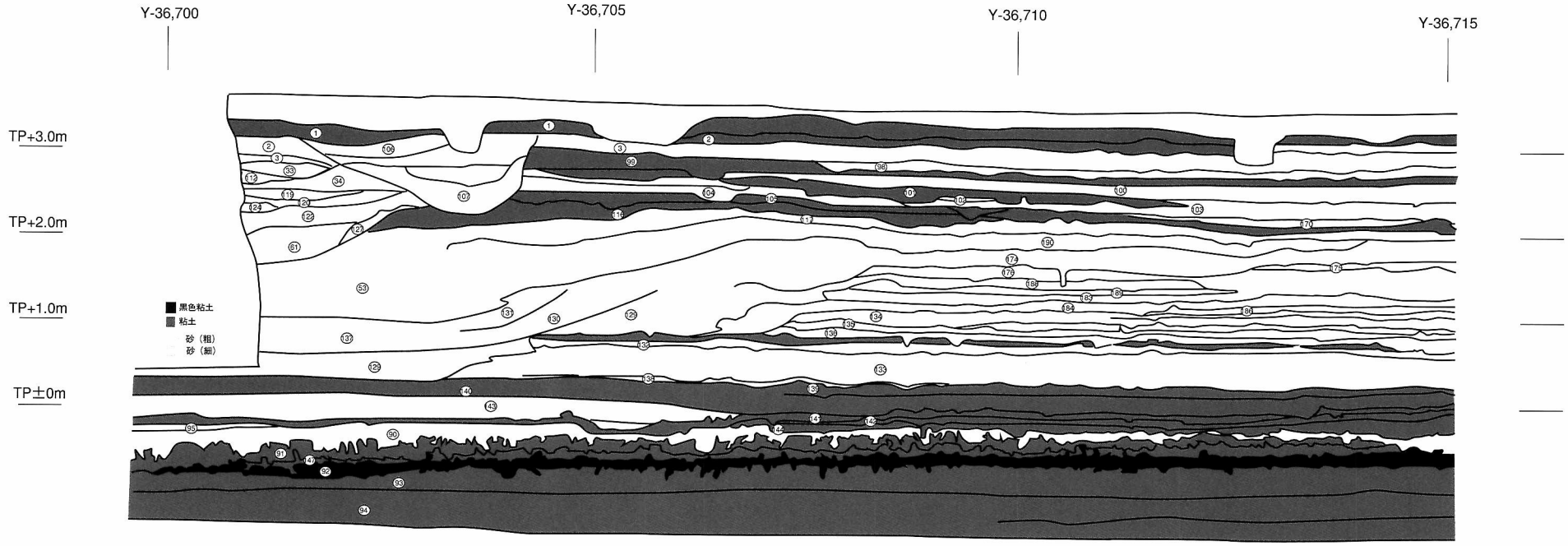
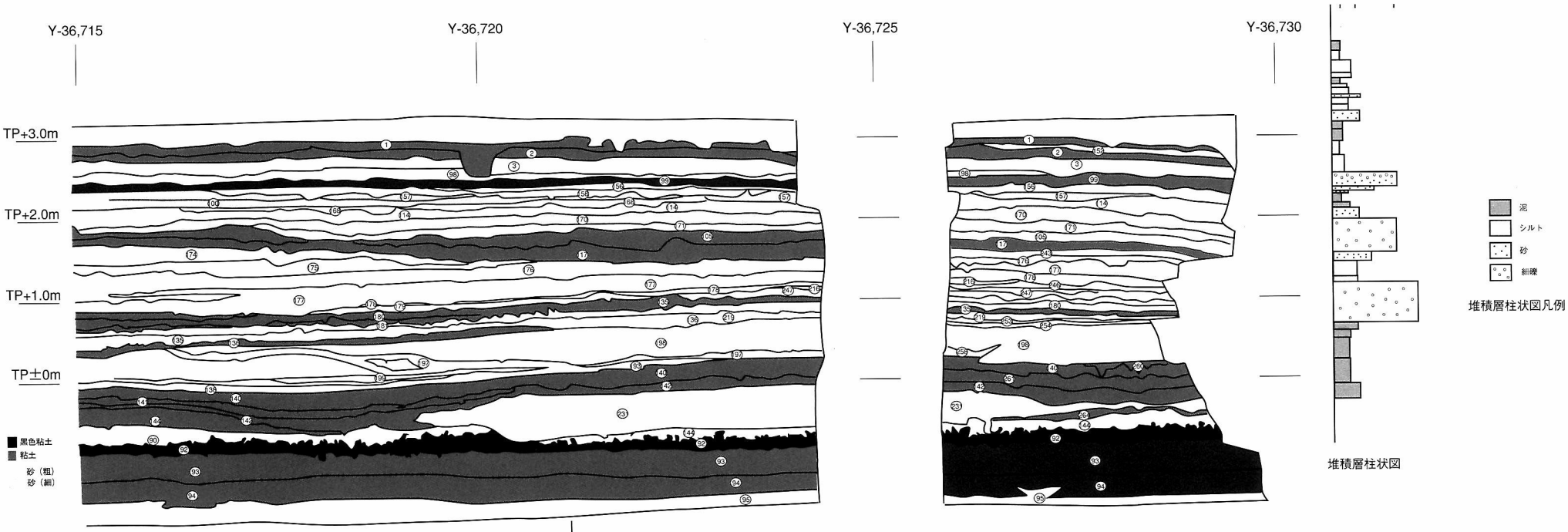


図８　トレンチ南壁断面図　その３



1.5Y4/1 粘土 鉄分多く含む
2.5Y4/1 粘土 鉄分多く含む
3.7.5Y3/2 砂混砂質シルト 鉄分多く含む
4.10YR7/8
5.7.5YR6/1中粒砂
6.5Y6/1 細砂質シルト
7.7.5YR7/3 シルト
9.2.5Y5/4
10.2.5Y5/2
11.7.5YR3/4
12.2.5Y5/1
13.5Y4/2 砂混シルト 鉄分 ラミナあり
14.7.5Y3/2
15.10Y3/1
16.10YR4/3 シルト質細砂
17.10YR3/4 砂混粘土
18.5GY2/1 シルト混粘土 ラミナあり・炭化物・ 植物遺体入る
19.2.5GY3/1 粘土質シルト 炭化物入る
20.5Y2/1 砂混シルト
21.7.5GY3/1 砂混シルト
22.5Y6/4 砂礫
23.5BG3/1 シルト
24.5BG4/1 炭混粘土
25.5Y7/4 シルト混細砂 ラミナあり
26.5Y6/4 細砂
27.5Y6/3 荒砂 混細砂 ラミナあり
28.5Y3/1 砂混シルト ラミナあり
29.10Y4/1 粘土
30.10GY6/1 シルト混粗砂 ラミナあり
31.2.5GY3/1 シルト
33.10YR5/1粗砂

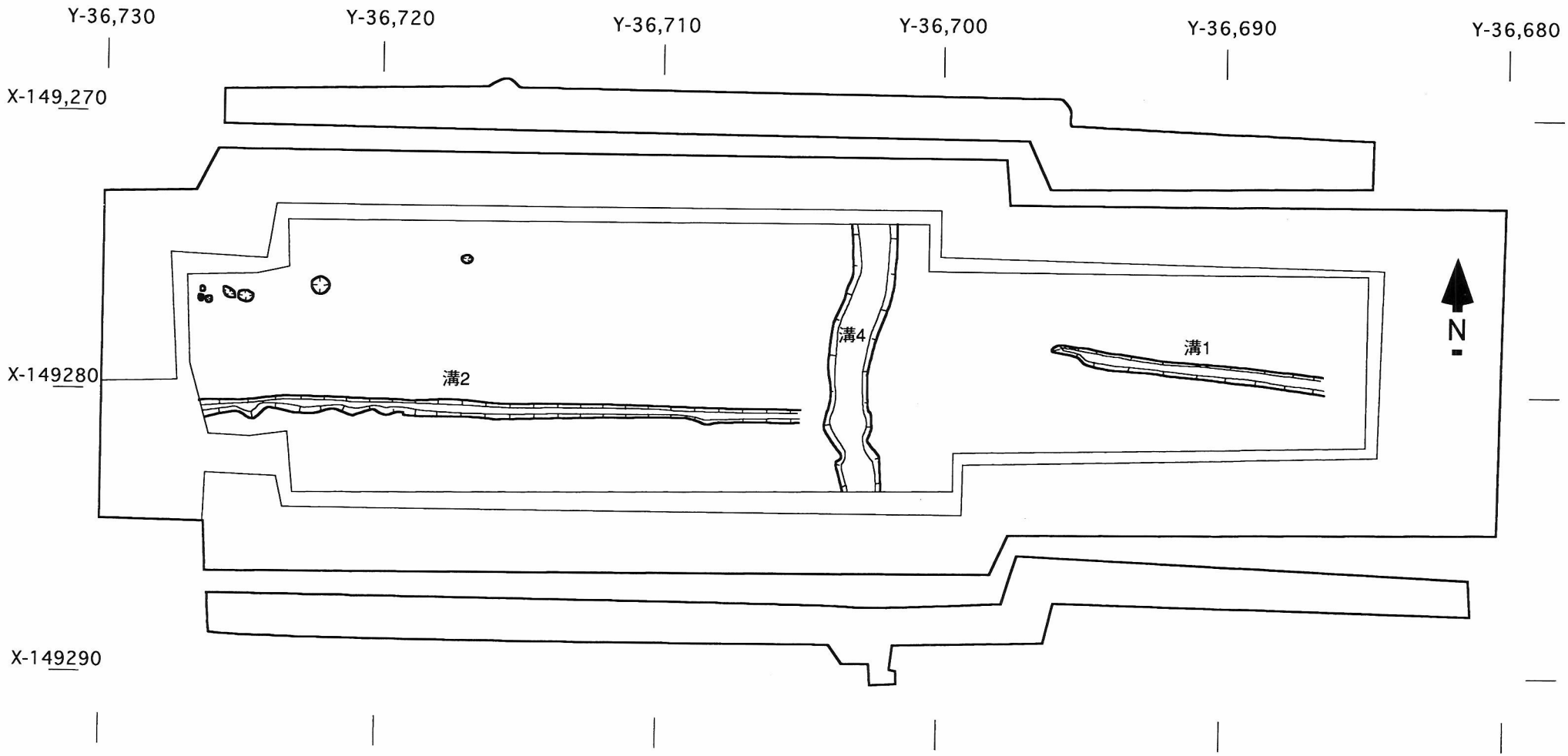
39.7.5YR4/6 砂礫混砂質シルト
40.10YR7/2 細砂 シルト ブロック入る
41.2.5Y5/1 粗砂
42.10YR7/4 砂混砂質シルト
43.5YR6/1 細砂質シルト
45.5YR6/1 砂礫混砂質シルト
49.7.5YR3/4 粘土 鉄分多く含む炭化物入る
50.10YR4/4 シルト質細砂
51.2.5Y4/2 砂混粘土 鉄分
52.2.5Y4/1 粘土
53.2.5Y6/3 砂礫 ラミナあり
54.2.5Y4/2 粘土 鉄分入る
55.5Y5/2 砂混シルト
61.2.5Y8/2 砂礫 混細砂(5Y3/2 粘土ブロック入る)
62.7.5Y6/1 荒砂 ラミナあり
63.10Y3/1 シルト質細砂 ラミナあり
64.2.5Y4/1 シルト混砂礫
66.5GY2/1 シルト質粘土
68.5GY3/1
69.5Y6/4荒砂混粗砂
72.5G3/1
74.2.5GY4/1
75.7.5Y4/2
76.5Y5/1
77.5GY4/1
89.10GY4/1 細砂混粗砂
90.5Y3/1 粘土質シルト 植物遺体入る
91.5Y2/2 粘土 植物遺体入る
92.7.5YR1.7/1 粘土 7.5GY3/1 粘土ブロック入る
93.2.5Y3/1 粘土
94.5Y3/1 粘土

104.5BG7/1 極細砂
105.5BG7/1 細砂
106.N 5/ 砂混シルト砂礫入る
107.2.5Y6/1 砂混シルト 鉄分
109.10YR4/3 粘土
110.10YR5/6 砂混粘土質シルト
112.5PB6/1 中粒砂
114.2.5Y5/4 シルト
115.10YR3/2 粘土 鉄分
116.2.5Y3/3 粘土 鉄分多く含む
117.2.5Y4/1 砂質粘土
118.10YR3/1 粘土
119.10YR3/3 砂礫
120.2.5Y5/4 中粒砂混荒砂
122.2.5Y4/3 細砂 ラミナあり
124.2.5Y3/3 砂混砂礫
127.5Y4/2極細砂
129.5Y5/4 細砂 ラミナあり
130.2.5GY6/1 中粒砂混荒砂 植物遺体入る
131.7.5Y5/3 中粒砂 炭化物多く含む ラミナあり・ 植物遺体入る
132.10GY3/1 シルト炭化物入る
133.10GY5/1 荒砂混中粒砂 ラミナあり
134.2.5GY3/1 粘土 炭化物・ 植物遺体入る
135.10G3/1 シルト質砂
136.5G3/1 粘土
137.7.5Y5/2 粗砂混荒砂
138.5BG6/1 細砂
139.2.5GY4/1 粗砂混粘土 炭化物入るラミナあり リン入る
140.7.5Y4/1 粘土 (植物遺体入る)
141.2.5GY2/1 粘土
142.5Y3/1 粘土 (植物遺体入る)
143.5Y5/2 砂混シルト (ラミナあり)

156.7.5YR5/8 シルト
157.10Y5/1 細砂
158.7.5YR3/3 シルト
159.5Y4/2 細砂混中粒砂
160.5PB7/1 細砂
162.5YR5/3 シルト
168.10YR3/3
170.7.5YR4/4
171.5Y4/2
174.5Y3/2 シルト
175.7.5Y6/2 シルト質細砂 ラミナあり
176.2.5GY4/1 シルト 鉄分炭化物入る
177.7.5Y6/2 粗砂質砂礫 ラミナあり
178.10Y4/1 細砂
179.2.5GY3/1 砂混粘土
180.7.5Y3/1 粘土

183.7.5Y3/2 シルト質粘土炭化物入る
184.5Y3/2 粗砂
185.5Y4/2 荒砂
186.7.5Y4/1 砂礫 混粘土
187.7.5GY4/1 シルト 炭化物入る
188.10Y3/1 粗砂混シルト ラミナあり炭化物入る
189.2.5GY4/1 シルト混砂 ラミナあり
190.5Y4/2 シルト混細砂
197.10Y4/1 シルト質砂
198.7.5Y3/1 砂混シルト ラミナあり.植物遺体入る
199.5BG4/1 細砂
200.5G2/1 シルト質粘土
201.2.5GY3/1 砂混シルト
202.2.5Y7/3 粗砂 ラミナあり 植物遺体入る
212.2.5Y7/4 粘土
216.10Y5/2 荒砂
217.2.5GY3/1 シルト炭化物入る
219.2.5GY4/1 砂混粘土
223.2.5GY3/1 細砂混砂質粘土 ラミナあり
224.10Y4/1 砂 鉄分含む
229.7.5Y4/1 粘土質シルト　炭化物入る
231.5Y8/4 荒砂 ラミナあり
243.7.5GY3/1 砂質粘土
246.5G3/1 シルト混砂 ラミナあり
247.5Y6/2 荒砂 ラミナあり
248.5Y2/1 シルト質粘土 炭化物入る
249.2.5GY3/1 粘土
250.2.5Y2/1 砂混粘土 炭化物入る
253.2.5GY2/1 炭混シルト
254.2.5GY4/1 砂質シルト
255.10GY5/1 粗砂
258.5BG6/1 細砂
260.7.5Y4/1 粘土 植物遺体・粗砂入る
261.7.5GY3/1 粘土
264.5Y3/1 粘土 植物遺体入る

図9　第1面遺構平面図


Y-36,730
Y-36,720
Y-36,710
Y-36,700
Y-36,690
Y-36,680
X-149,270
X-149280
X-149290
溝1
溝2
溝4
N

25層がオーバーハングする。畦畔らしい高まりと、人間などの踏み込みを検出。下層では、西半部で自然河道と、それに伴う踏み込みを検出。

29～33層　　緑灰色シルト～粗砂層

34～35層　　暗オリーブ灰色～オリーブ黒色シルト層

36～37層　　オリーブ黒色～黒色粘土層　36層は弥生時代前期の土器や石器を含む遺物包含層、37層は土器の出土はなかったが、石鏃を検出。縄文晩期までさかのぼる可能性あり。

38～39層　　黒褐色～オリーブ黒色粘土層　最終面

4. 遺構と遺物

今回の調査では、6面の遺構面を検出した。以下各面ごとに述べる。

4.1 第1面

東西方向の溝を2条、南北方向の溝を1条検出した。

東西溝1は、トレンチ東半部中央に位置する。西端部は途中で消えており、東端部は、撹乱で削られていることから、本来の規模は不明である。検出規模は、長さ9.6m、幅0.7m、深さ0.4mを呈する。

遺物は、陶磁器細片のほか、瓦器椀、須恵器、土師器の細片が出土した。

東西溝2はトレンチ西半部南よりに位置する。西端部はトレンチ外方に広がり、東端部は溝4の手前で切れていることから本来の規模は不明である。検出規模は、長さ20.7m、幅0.7m、深さ0.1mを呈する。

遺物は、瓦、土師器、須恵器の細片が出土した。

南北溝4は、トレンチ中央部を縦断しており、南北両端はトレンチの外方に広がることから、本来の規模は不明である。検出規模は幅1.5m、長さ9.3m、深さ0.2mを呈する。

遺物は、瓦や染め付けなどの陶磁器類のほか瓦器椀や灰釉陶器、須恵器、弥生土器、砂岩製砥石などが出土した。（図11）

時期は近代から学校建設以前のものと考えられる。

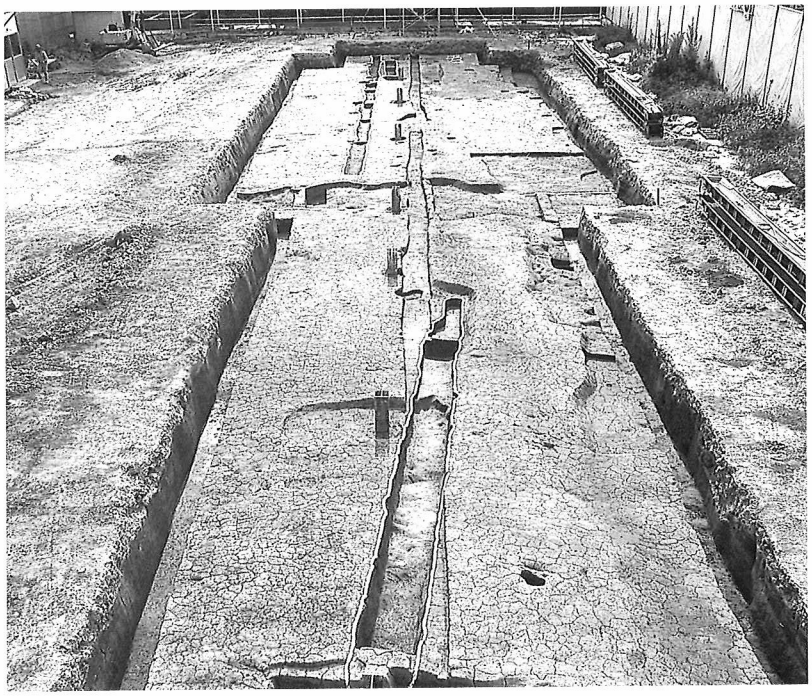
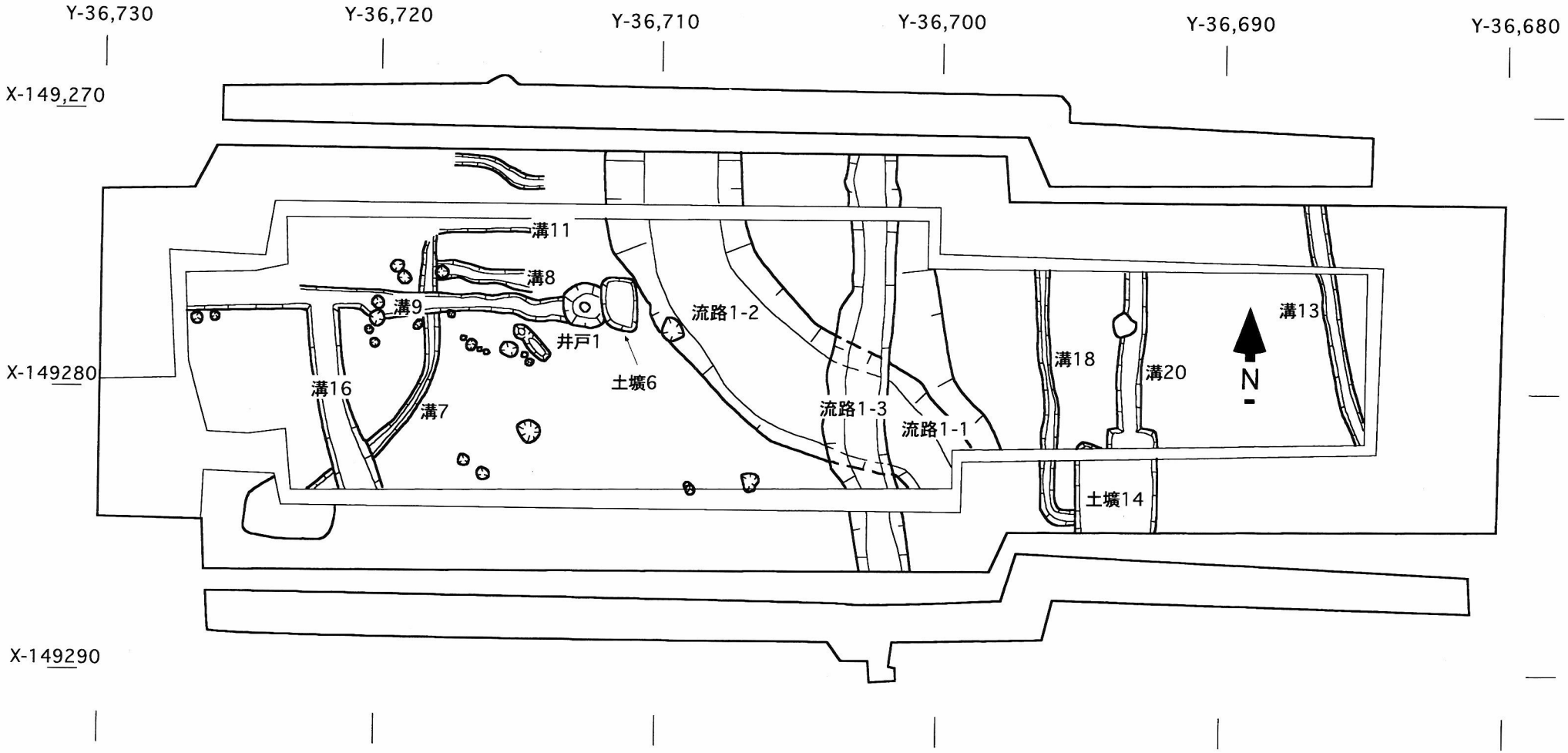


図10　第1面全景　東から

図11　溝4出土遺物

図12　第2面遺構平面図



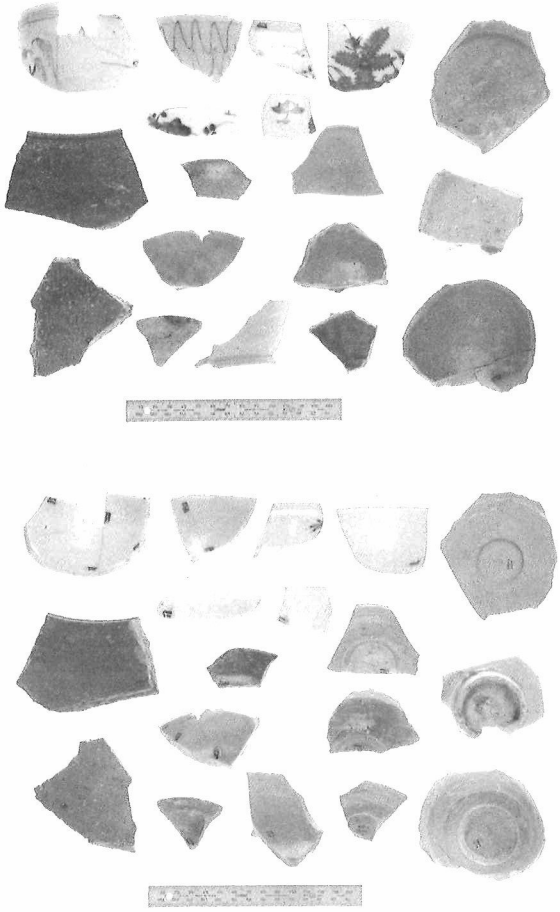


図 15　流路 1 出土遺物　A・B 面

図 13　第 2 面全景　東から

図 14　第 2 面全景　西から

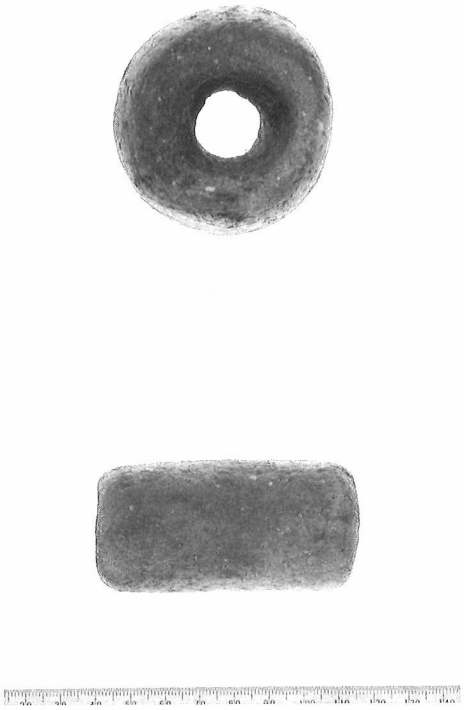


図 16　流路 1 出土遺物　土錘

4.2 第 2 面

自然流路のほか、多くの溝と土壙、ピット、井戸などを検出した。

トレンチの中央部を南北に縦断する自然河道1を検出した。南北両端は、ト

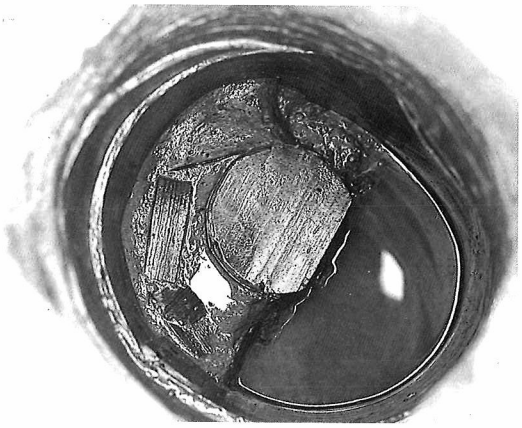


図 17　井戸 1 内遺物出土状況

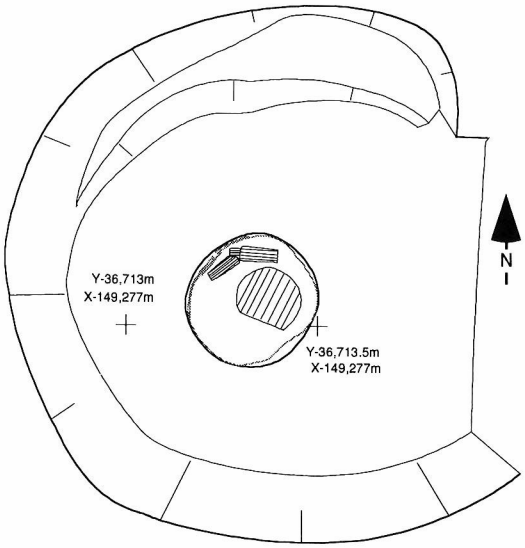


図 19　井戸 1 平面図

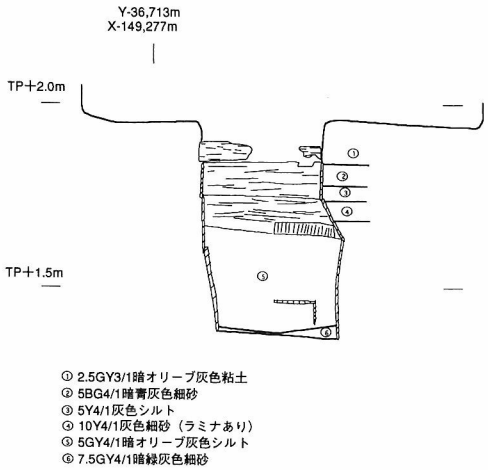


図 18　井戸 1 断面図

図 20　井戸 1 断ち割り状況　東から

レンチ外方へ広がることから本来の規模は不明である。遺構内に溜まった堆積土の違いから大きく3つの流向が認められた。一番最後に埋没したものは流路1-3である。ほぼ略南北の方位をとり、検出規模では幅2m長さ15mを呈する。最も早くに埋没したものは、流路1-1で検出規模は、幅10m、長さ14m、深さ0.6mを呈する。底の部分からは、人間や偶蹄目の足跡を検出した。

出土遺物は、染め付けや唐津・瀬戸・常滑などの陶磁器や須恵器・土師器皿・土錘などがある。（図15～16）

遺物の時期から、近世以降に埋没したものと考えられる。

トレンチ西半部で井戸を検出した。直径1.5mの円形を呈した堀方に井戸側として、直径35cmの曲物を3段組み合わせたものを使用する。上面が削平されているため、検出面が掘りこみ面ではない。したがって本来の深さは不明であるが、検出規模は1m。

遺物は直径17cmの柄杓のほか須恵器細片が出土した。

溝9はトレンチ西半部中央で検出した東西溝である。ほぼ略東西の方位を呈する。西端部はトレンチの外方へ広がり、東

図 21　溝 9 出土遺物

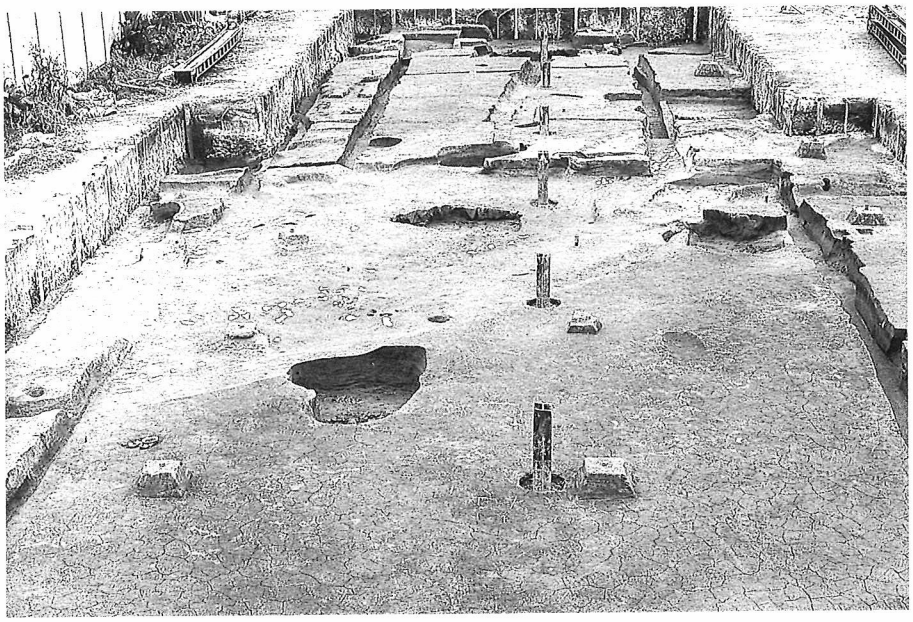


図22　流路1全景　西から

図23　流路底で検出した足跡の型を採るため水で溶いた石膏を足跡に流しているところ

図24　流路1の底で検出した足跡　人間のものと、牛と考えられる偶蹄目の足跡（中央の「U字」型のもの）

端部は井戸1に切られる。したがって本来の規模は不明であるが、検出規模は、長さ13.2m、幅0.8m、深さ0.25mを呈する。

遺物は須恵器甕細片のほか、土師器皿・杯などが出土した。（図21）

井戸1、溝9ともに遺物などから、奈良～平安時代以降に埋没したものと考えられる。

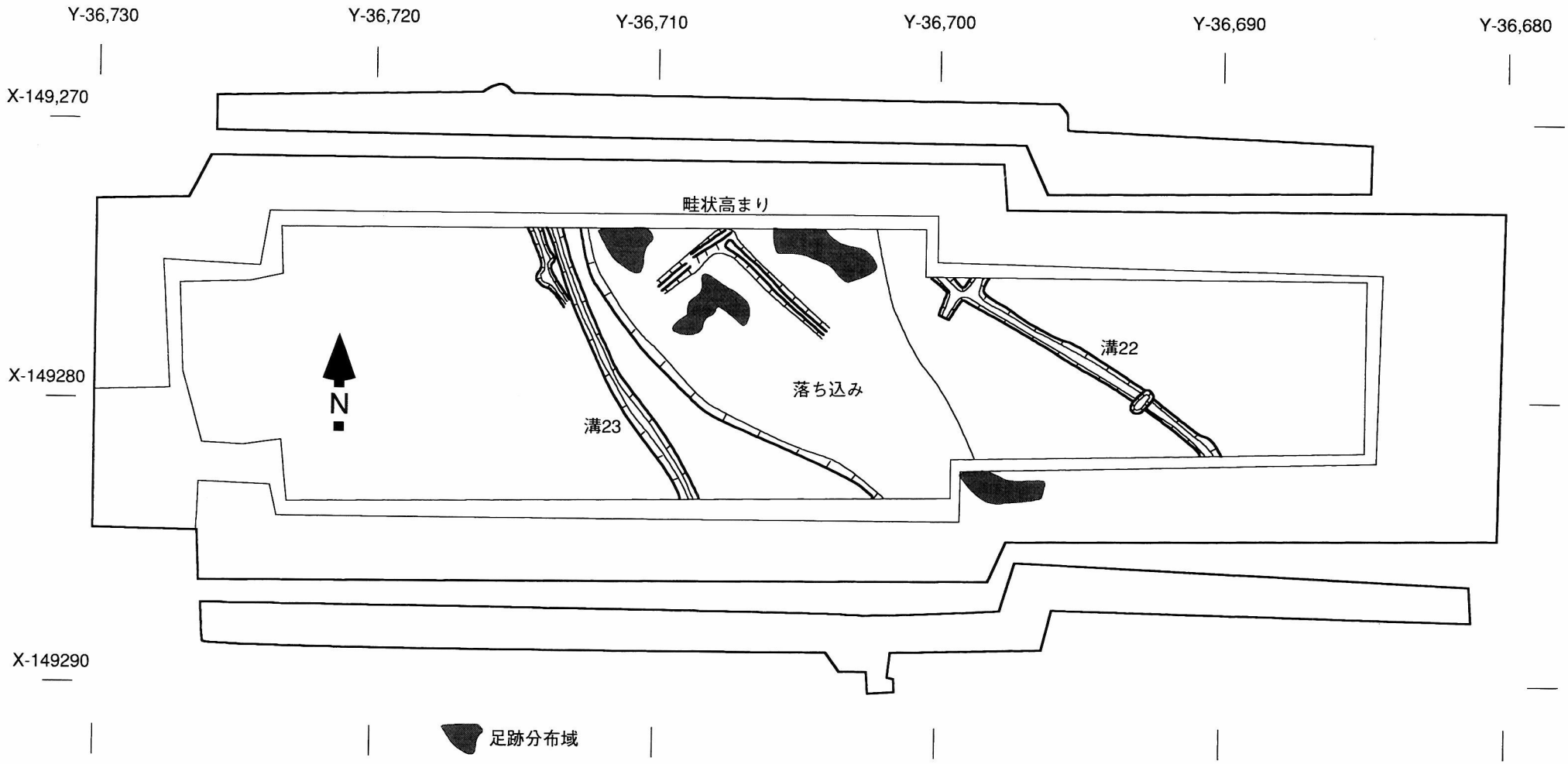
その他、土壙・溝・ピットなどを検出した。

4.3 第3面

トレンチ中央部で東へ落ち込む落ち込みを検出した。落ち込みは、南北両端部がトレンチ外方に広がるため、本来の規模は不明である。検出規模は、南北14m、幅8.5m、深さ0.1mを呈する。

底部分には南東から北西へ歩行方向がわかる人間の足跡を検出した。（図

図25　第3面遺構平面図



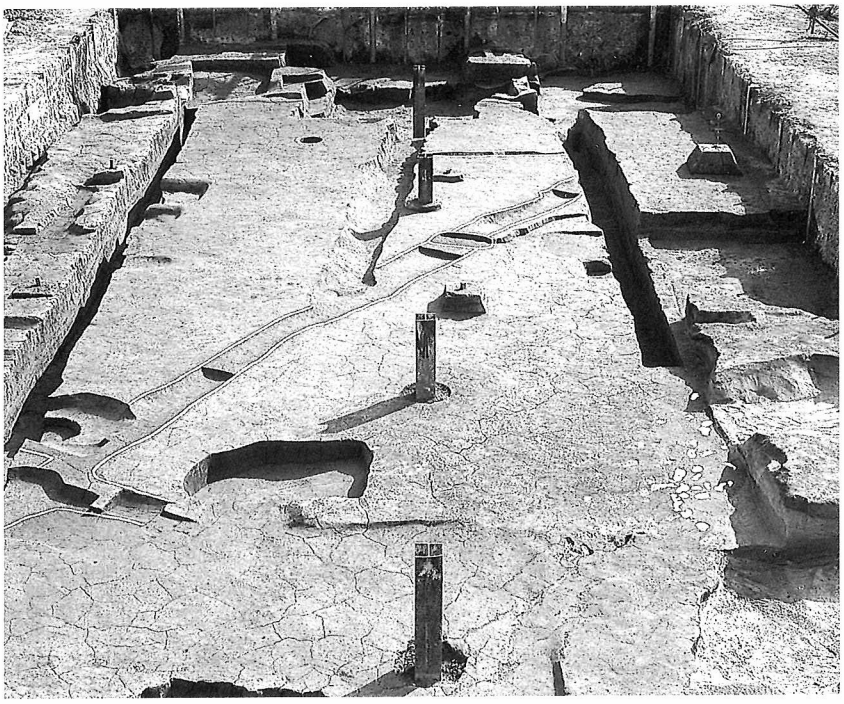
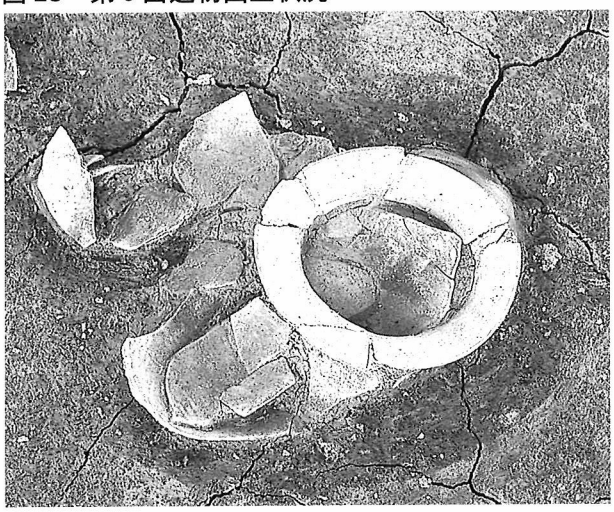


図26　第3面東半部遺構検出状況　西から

図27　トレンチ北壁中央部　北西～南東に向かう人間の足跡　北西から

図28　第3面遺物出土状況



27)

落ち込みの両側には落ち込みにそった方向で広がる溝を検出した。

溝22は落ち込みの東方に隣接し、北端部分で分岐するが、座

図29　第3面出土古式土師器甕

図30　第4面遺構平面図

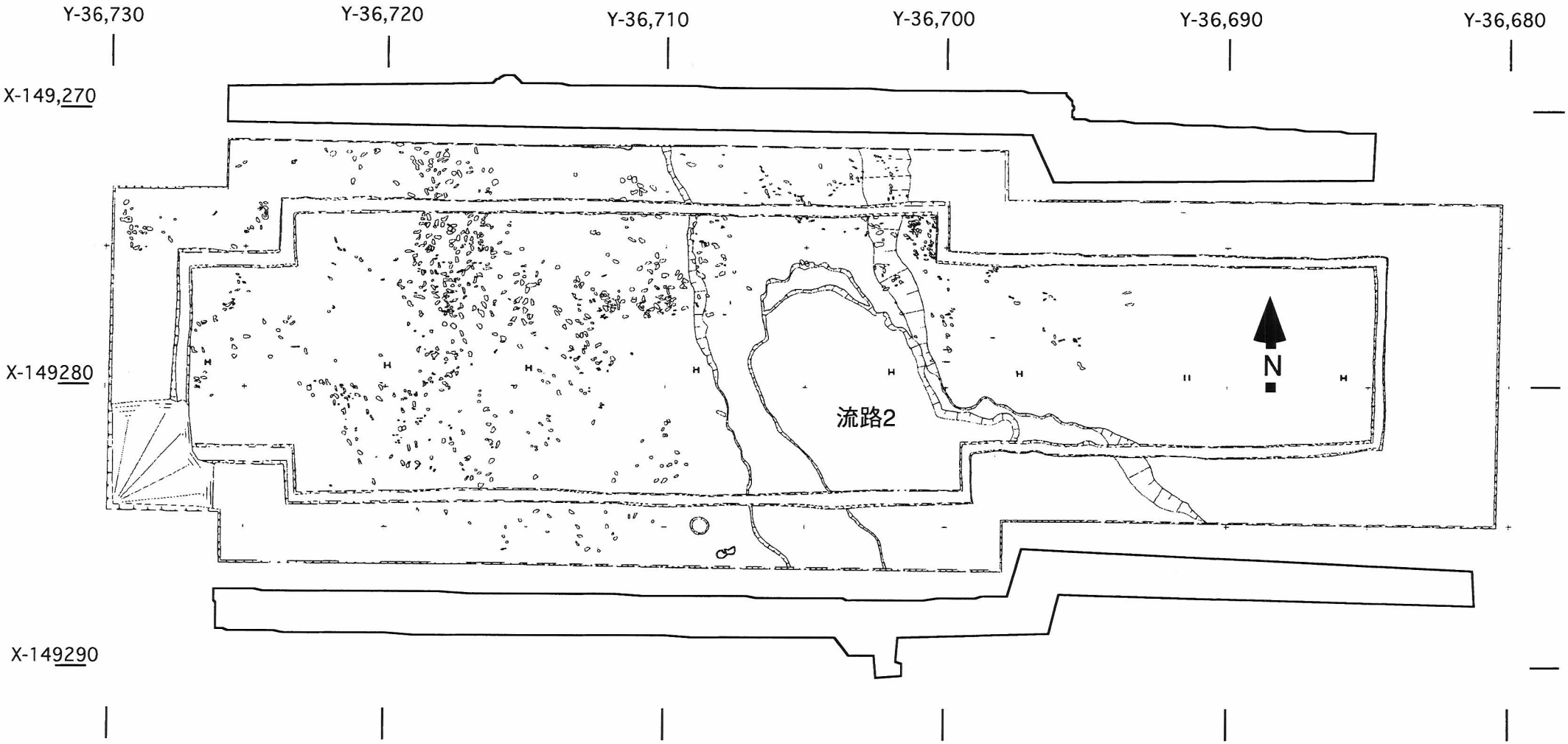


図31　第４面全景　西から

図32　第4面トレンチ西部
検出足跡　北から（左下）

図33　第４面トレンチ西部
検出足跡　南東から（右下）

標北から58度西にふる方位をとる。南北両端部はトレンチ外方へ広がる事から本来の規模は不明である。検出規模は、長さ 12.1m、幅 0.6m を呈する。

溝23は落ち込み西方に隣接する。座標北から28度西にふる方位をとる。南北両端部はトレンチ外方へ広がる事から本来の規模は不明である。検出規模は、長さ 12m、幅 0.5m、深さ 0.12m を呈する。

4.4 第４面

トレンチ中央部で南北方向の自然河道を検出した。

自然河道２は、トレンチ中央部に位置し、座標北から25度西にふる方位をとる。

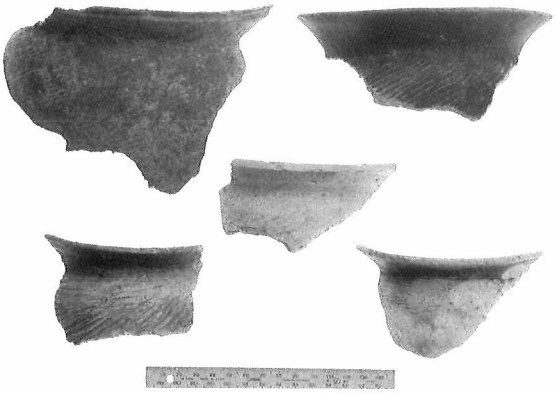


図34　自然河道2出土遺物
弥生土器　甕（上左）

図35　自然河道2出土遺物
弥生土器　壺（上右）

図36　自然河道2出土遺物
弥生土器　鉢・手あぶり型土器
など（右）

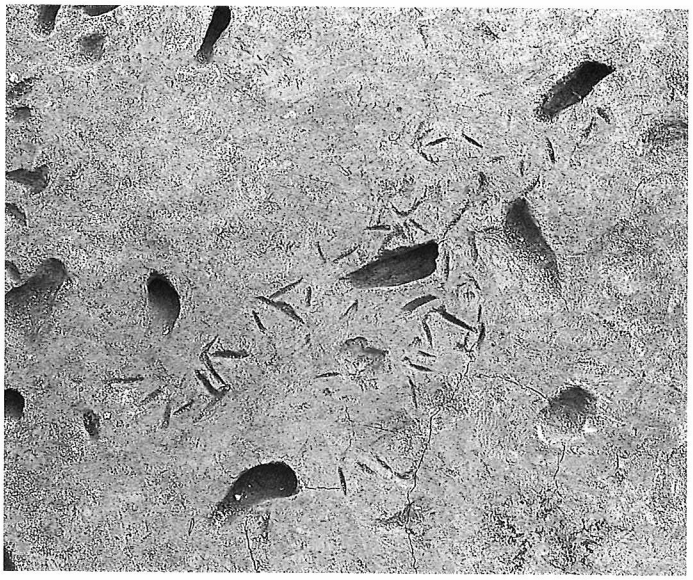


図 37　トレンチ西半北端部で
検出した人間と大型の鳥の足跡

南北両端部はトレンチ外方へ広がる事から本来の規模は不明である。検出規模は、長さ 17m、幅 7.8m、深さ 0.65m を呈する。北端部の底部分には足跡が顕著である。

遺物は弥生土器甕・壺・鉢・高杯・手あぶり型土器などが出土した。(図34～36)

出土遺物から、弥生時代後期以降に埋没したものと考えられる。

自然河道２の西岸部からトレンチ西端部までの範囲で、人間や大型の鳥の足跡を多数検出した。

特に歩行方向などに規則性は認められないが、検出範囲の中では北東部分

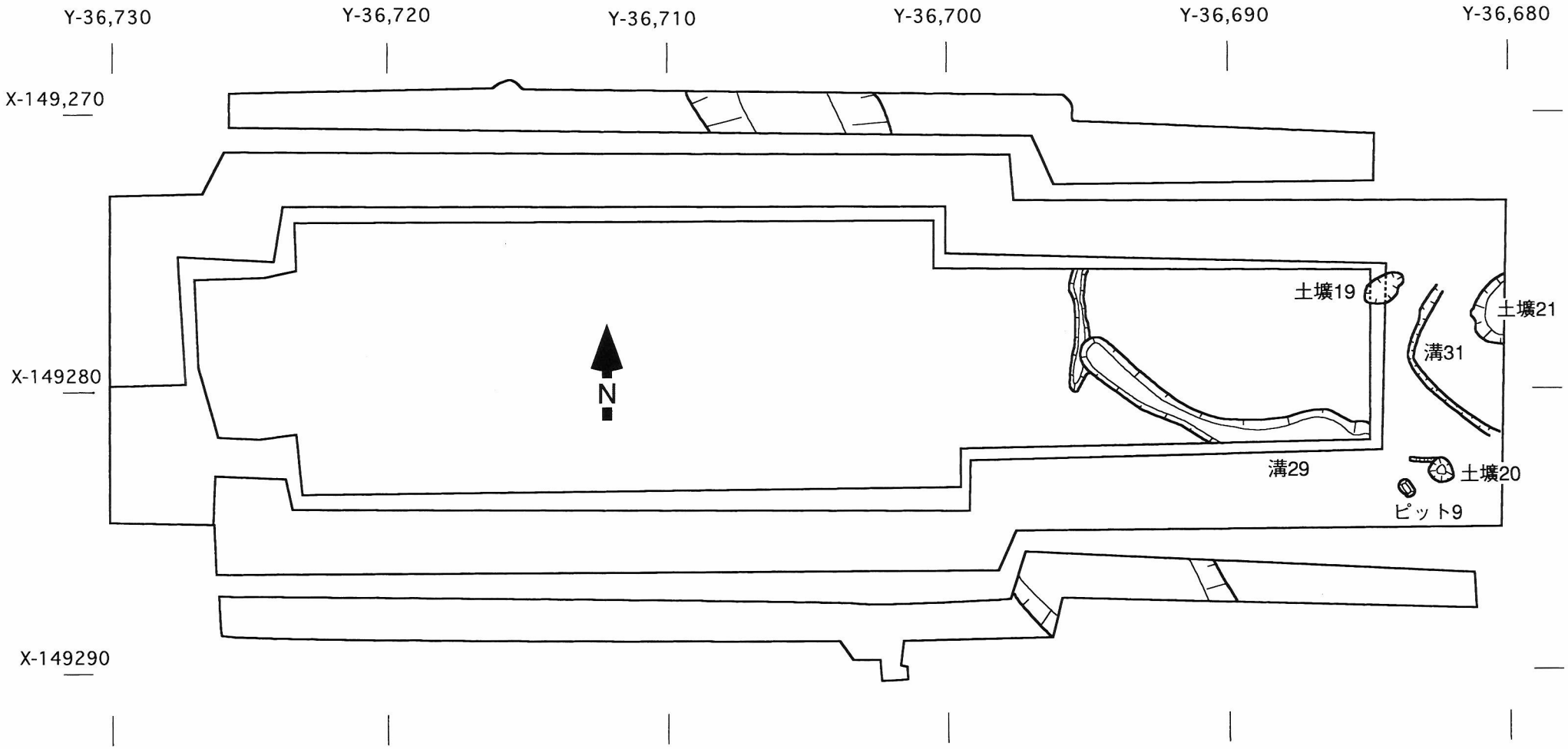


図38　第5面遺構平面図

図39　第5面　トレンチ東部溝29検出状況　南から

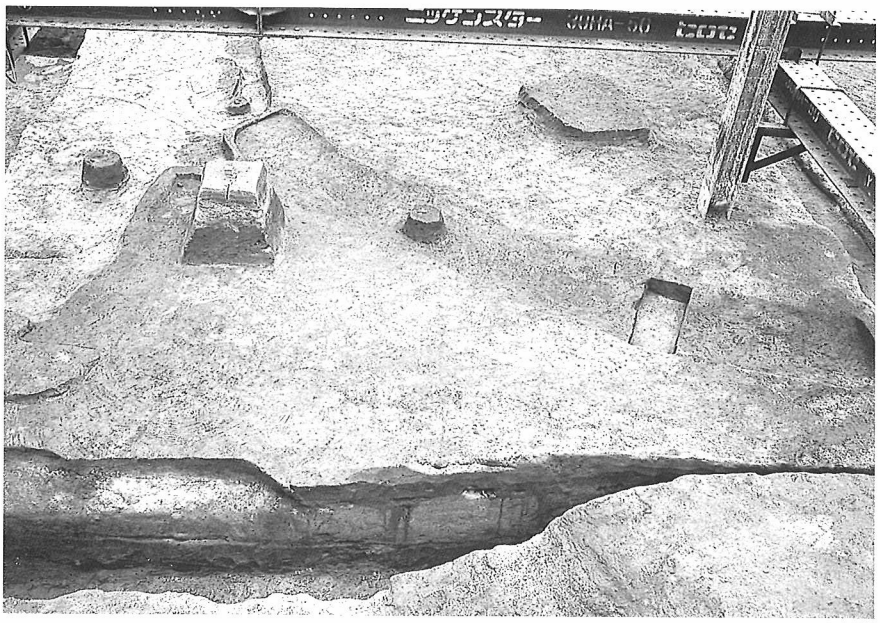


図40　第5面　トレンチ東端部遺構検出状況　南から

に顕著に見られる。

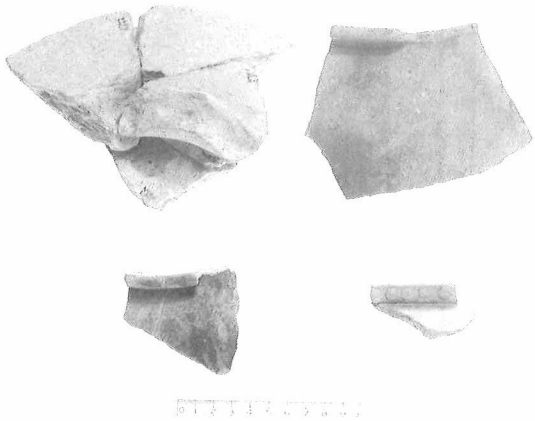


図41　溝29出土遺物

4.5 第5面

トレンチの東半部で溝や土壙などを検出した。

溝29はトレンチ東半部南よりに位置し、南壁面から北に向かって緩やかに弧を描く。北端部は途中で消滅しており、南端部はトレンチ外方に広がるため、本来の規模は不明である。

検出規模は、長さ12.3m、幅1.2mを呈する。遺物は、弥生土器甕・壺などが出土した（図41）

溝31はトレンチ東端部で土壙21の西側を囲むように湾曲してある溝である。北端部分は途中で消滅し、南端部分はトレンチ外方へ広がるため、本来の規模は不明である。検出規模は、長さ7.2m、幅0.3m、深さ0.1mを呈する。

図42　土壙21出土遺物

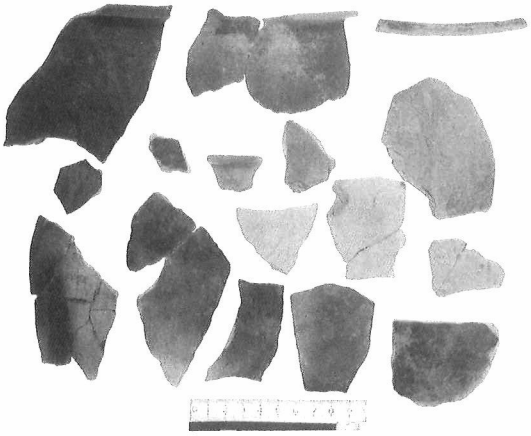


図43　第5面出土遺物　その1

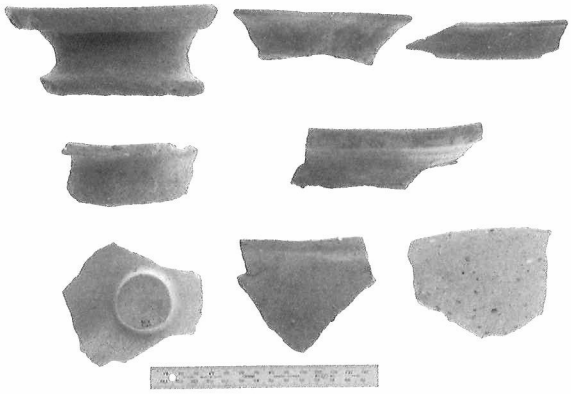
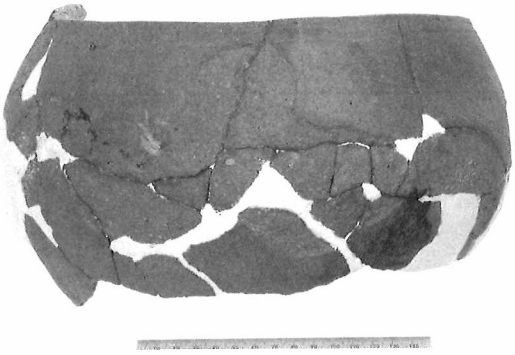


図44　第5面出土遺物　その2



土壙21はトレンチ東端部に位置する。東半分がトレンチ外方に広がるため本来の規模は不明であるが、検出規模からは直径2.6mの不正円形を呈すると考えられる。深さは0.3m。

遺物は弥生土器甕などが出土した。（図42）出土遺物から弥生時代中期後半以降に埋没したものと考えられる。

土壙20はトレンチ東端部南よりに位置する。遺構の東半分は断面観察用畦にかかっていたため、当初プランで確認できた規模は長辺約1.5m短辺約0.8mの半円形を呈する。しかし調査の進展にともなって、本来の規模ではないものの、最終的には直径約1.5mの不整円形を呈し、深さ約1.0mの遺構であることがわかった。また、断面の観察の結果砂層を掘り抜いて造られていることから、井戸であった可能性も考えられる。

遺物はいずれも破片であるが、外反する口縁部と上下にわずかに肥厚した口縁端部をもち、あまり施紋を施さないが外面にススが付着した中型の壺や端部をつまみ上げた口縁や「く」の字型の口縁で端部に凹線を施し張り出す胴部を持つ刷毛目調整を施した中型の甕、また杯の上半部に数条の凹線を施す高杯など、弥生時代中期後半の特徴を有する土器（図47）とともに、有

図45　土壙20西壁断面

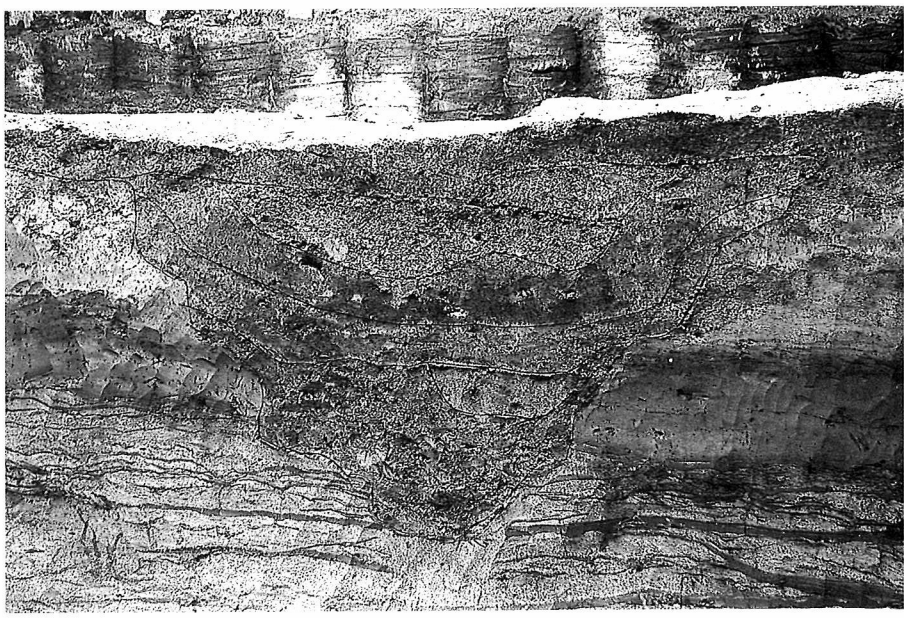
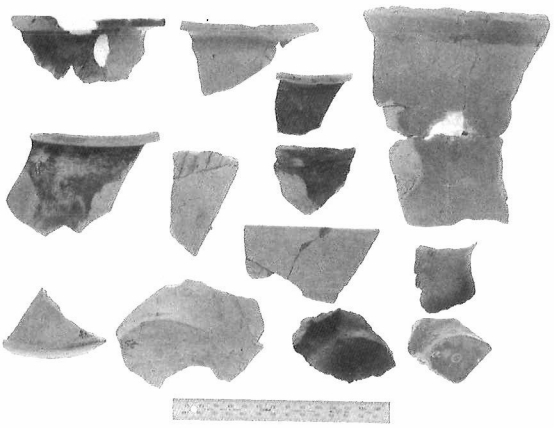


図46　土壙20出土磨製石剣
A面（左）・B面（右）

図47　土壙20出土土器



樋式中細形銅剣を模倣した磨製石剣（図46）やイノシシと考えられる動物の歯を検出した。

磨製石剣については、拙著（池崎1994）に詳述のためここでは簡単な記述にとどめる。

銅剣形石剣は４層目から出土した。材質はラミナ状の縞目のはいった暗灰色の粘板岩。「身」（以下各部の名称は岩永1986による）の上半部は欠損しているが、残存全長9.8cm。「身」は長さ6.8cm、幅3.7cm、「脊」の一番厚い部分で厚さ1.7cmを測る。断面形は丸みをおびたひし形である。「茎」は長さ3.0cm、幅1.4cmを測り、断面形は不正形な隅丸方形を呈する。

Ａ面は「脊」を挟んで２本の「樋」を有し、向かって左側は幅約6mm、右側は幅約2mmの条線状である。Ｂ面は向かって左側に幅約7mmの樋が存在するが右側にはない。欠損部近くには両面から穿れた「双孔」がある。その双孔よりすこし茎よりの所に「刳込」と思われる打ち欠き・面取り部分が存在する。通常刳込は双孔より上部に位置するが、今回は双孔より下部にある。

製作工程の特徴としては、非常に丁寧な部分を有する一方、特に細部について雑な部分が見られる点が挙げられる。

「有樋式」である点など形態的特徴、供伴した土器の特徴などから、種定氏が提唱した（種定1990）分類においてⅡ式に相当すると考えられるが、造りの粗雑さが退化なのか、製作途上なのかは判然としない。祖形には中細型（有樋式）の銅剣が考えられることから、石剣自体は当初から祭器の目的で作製されたものであろう。しかし出土状況は祭祀に際して埋納された状況は呈しておらず、製作途中で破損した未製品を投棄したものとも考えられる。

4.6 第６面

上下に分けることができる。

上部は、トレンチ東半部に人間や鳥の足跡を検出した。

下部は、トレンチ西半部に人間や鳥の足跡を検出した。

トレンチ西半で南北方向の流路を検出した。

流路3は南北両端がトレンチ外方へ広がるため本来の規模は不明であるが、検出規模は長さ13m、幅6mを呈し、深さは0.5m。西岸部から底部西よりの部分に足跡が顕著である。東岸部には、板材が認められ、護岸に使用した可能

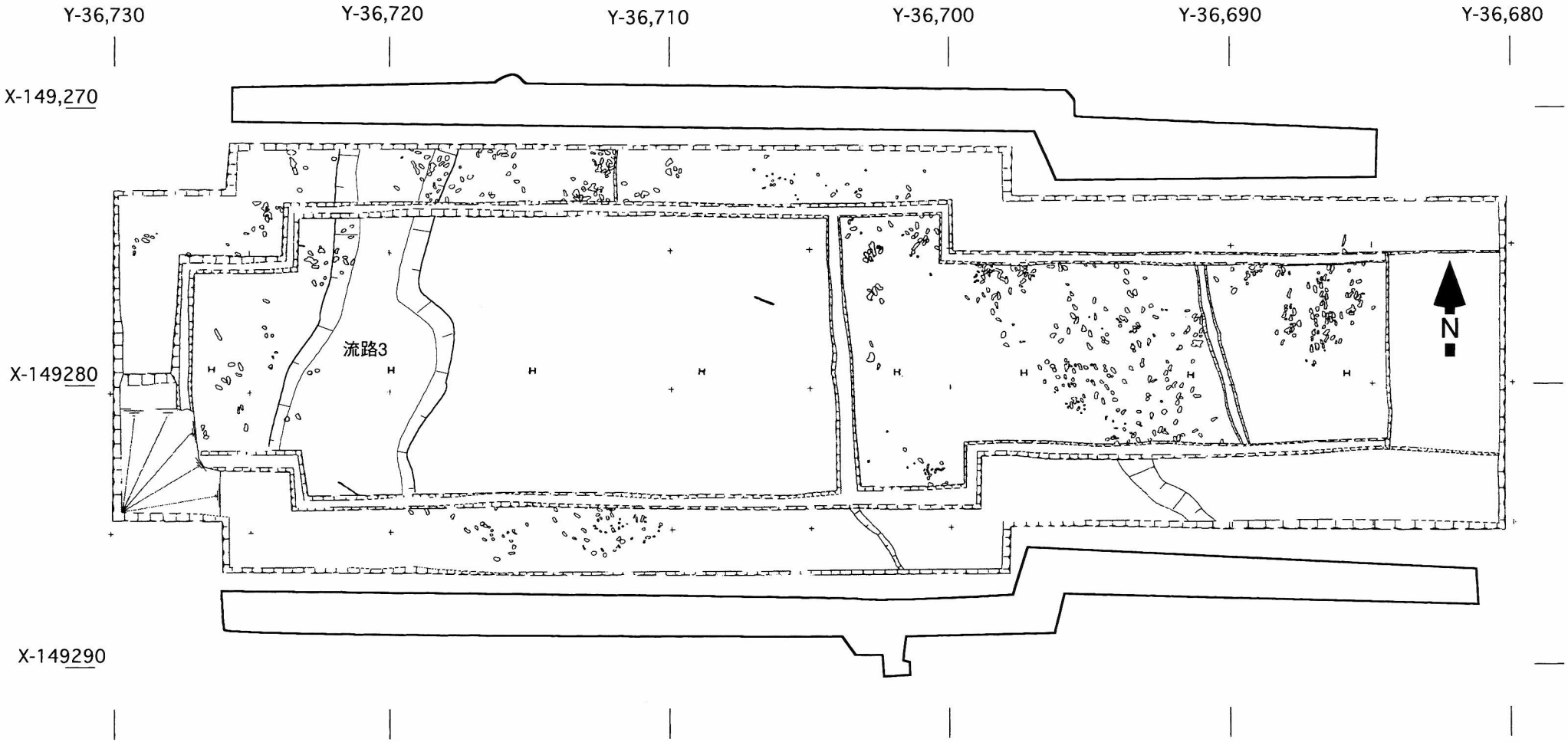


図48　第6面遺構平面図

図49　第6面　トレンチ西部流路3
検出状況　西から

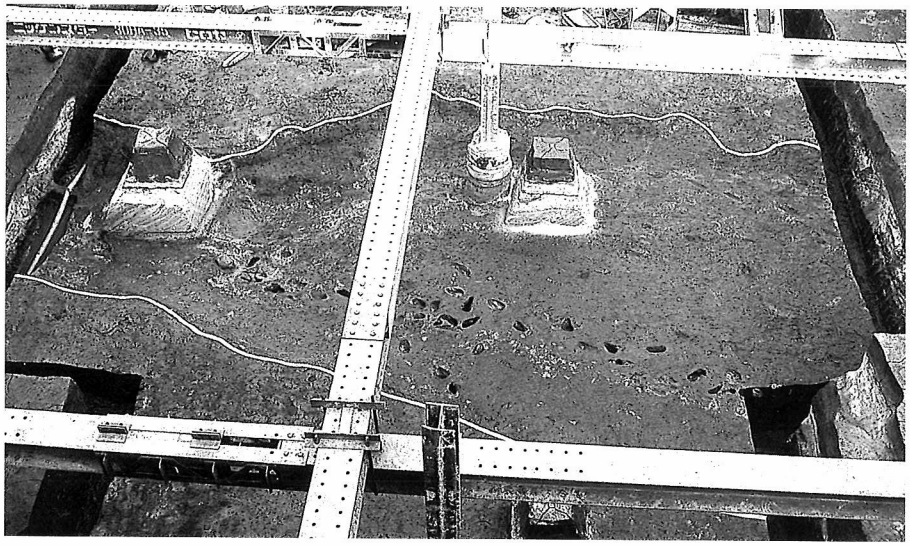


図50　第6面　トレンチ東部足跡
検出状況　北から（右上）

図51　トレンチ東部で検出した肉球を持つ大型獣の足跡（左上）

性が考えられる。

ほぼ全面で検出した足跡は、人間のものとともに、大型の鳥類の足跡や、足裏肉球をもった動物の足跡を検出した。肉球を持つ足跡は、長さ18cm、幅12cmを測る。このサイズからは、非常に大きな動物であることが推測できるが、種の特定には至っていない。

トレンチ北西端部では、北西に傾斜する落ち込みを検出した。

落ち込みの規模は直径約7.5mの不整円形を呈すると考えられるが、全体のほぼ3/4がトレンチ外方に広がるため、本来の規模は不明である。深さは約1m。

側溝の断面から、下位の砂層から斜めに噴き上がる噴砂が確認できた。したがって、この落ち込みは巨大な地震動による液状化現象に起因するものと考えられる。

6面以下

6面以下から、遺構は認められなかった。しかし堆積層中からは、弥生時代前期の土器（図54）のほか、石包丁（図55）・石鏃（図56）が出土した。

図52　トレンチ北西隅で検出した地盤の落ち込み　断面に噴砂が見られることから、地震によって地盤が落ち込んだものと考えられる。　南東から

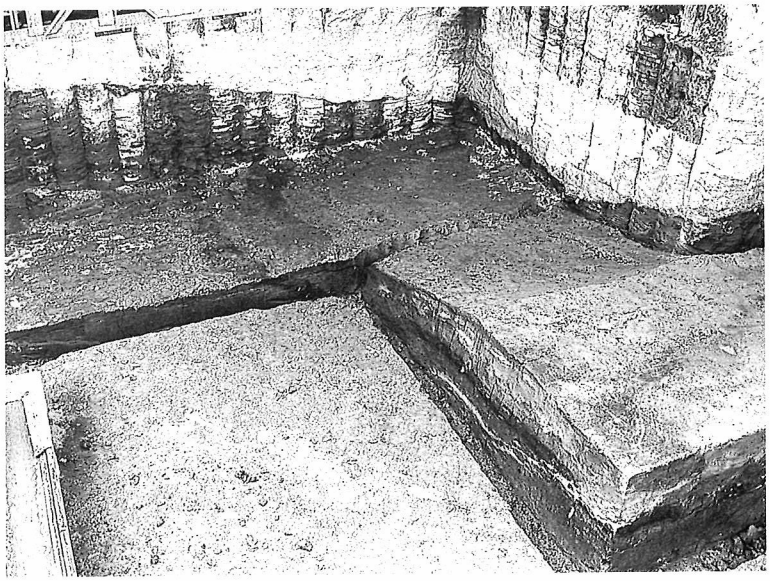


図53　トレンチ北西隅で検出した地盤の落ち込み　南東斜め上から

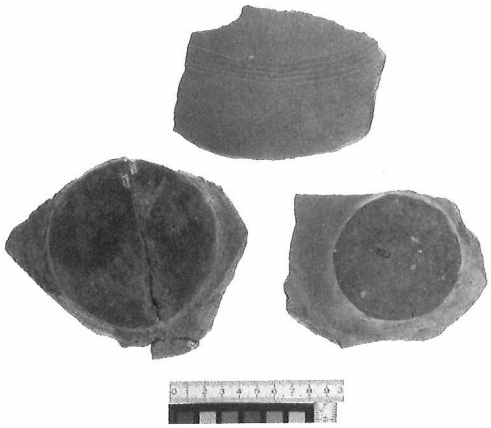


図54　6面下層出土弥生前期土器

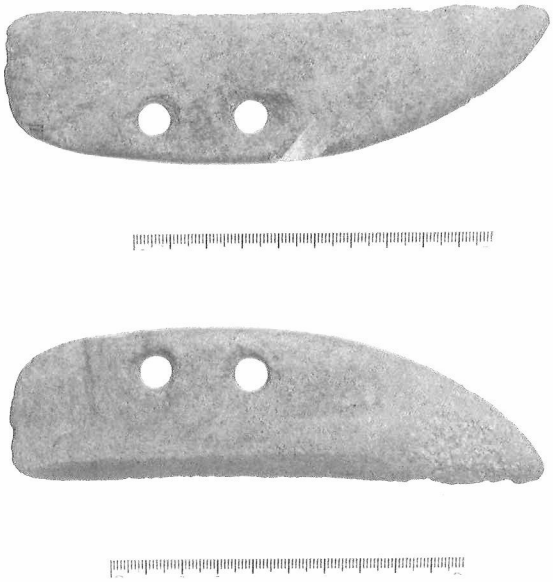


図55　6面下層出土石包丁　A・B面

図56　6面下層出土石鏃

5.巨摩廃寺遺跡の出土種実および木製品の種類同定

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

巨摩廃寺遺跡は、河内平野のほぼ中心に位置する弥生時代から室町時代にかけての複合遺跡である。今回第6次の調査では弥生時代・古墳時代・平安時代の遺物・遺構が検出されている。その中には当時の植生を推定する上で有効な種実遺体や、当時の人間が利用した木製品などが含まれている。今回の調査では、出土種実の種類同定および木製品の樹種同定を行う。

1.種実分析

(1) 試料

各試料については、表1に示す。

表1　出土種実の試料表

番号	試料名	時代・時期
25	KMH-6 第-B SE01 埋土R290	平安時代以降
26	KMH-6 第-B SE01 埋土④ R390	平安時代以降
27	KMH-6 第-B SE01 埋土④ R390	平安時代以降
28	KMH-6 第-B SE01 埋土（オケ内） R440	平安時代以降
29	KMH-6 第-B SE01 埋土 R441	平安時代以降
30	KMH-6 第-B SE01 埋土（オケ内） R440	平安時代以降
31	KMH-6 第-B SE01 埋土 R442	平安時代以降
32	KMH-6 第-B SE01 R445	平安時代以降
33	KMH-6 第-B SE01 埋土 R442	平安時代以降
34	KMH-6 寺-C 淡黄灰色砂層掘削中	弥生時代中期～後期
35	KMH-6 SR-01 淡黄灰色砂礫層 R426	弥生時代中期～後期
36	KMH-6 次-A 第４面旧河道内 R693	弥生時代中期～後期
37	KMH-6 次-D 第４面旧河道内掘削中 R696	弥生時代中期～後期
38	KMH-6 次-C 第４面旧河道内掘削中 R651	弥生時代中期～後期
39	KMH-6 東半部暗オリーブ灰色シルト層（第４面） R1078	弥生時代後期
40	KMH-6 掘-C 第６面Ａ面（足跡面） R1027	弥生時代中期前半
41	KMH-6 調-B 第６面掘削中（青灰色砂層） R1008	弥生時代中期前半
42	KMH-6 廃-C 黒色粘土層検出中 R1048	弥生時代前期～中期
43	KMH-6 査-A 黒色砂混粘土層 R1009	弥生時代中期包含層
44	KMH-6 次-A 最終面検出中 R1056	弥生時代前期
45	KMH-6 寺-A 最終面検出中 R1061	弥生時代前期
46	KMH-6 次-B 旧河道内掘削中 R748	弥生時代後期～古墳時代
47	KMH-6 寺-B 暗青灰色粘土混砂層 R880	弥生時代後期

(2) 分析方法

各試料について双眼実体顕微鏡下で観察し、その形態的特徴から種実遺体を同定した。同定した種実遺体は種類毎に瓶に入れ、エタノール中に保存した。

(3) 結果

結果は表2に示す。以下に検出された種類の形態的特徴について記す。

表２　出土種実の同定結果

種類	部位	試料番号																						
		25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47
オニグルミ	核																	1		1	1	2		
サワグルミ	核								1															
アカガシ亜属	果実								9															
アカガシ亜属	葉								3															
モモ	核												3	1	1								1	
カラスザンショウ属	核							1																
アカメガシワ	種子	1																						
ブドウ属	種子								1															
トチノキ	種子								1		1						2		2					
ミズキ	核								1															
オモダカ科	果実	3																						
オオムギ	胚乳		1	1																				
ホタルイ属	果実	33				11	1	7		13														
カヤツリグサ科	果実	20	23			3		1																
イボクサ	種子	9	27																					
カナムグラ	種子	1						1	1															
サナエタデ近似種	果実	24	6							3														
タデ科	果実	約200	約100			11				19														
ヤブガラシ	種子								1															
ヒシ属	果実								1															
シソ属	果実	56	4																					
ナス科	種子	6	3			2																		
メロン類	種子	1	1																					
ヒョウタン類	種子		1																					
ウリ科	種子															1								
メナモミ属	果実		1																					
オナモミ属	果実								1															
キク科	果実					4																		
合計		354	167	1	0	31	1	10	20	35	1	0	3	1	1	1	2	1	2	1	1	2	1	0

・オニグルミ　(*Juglans mandshurica* Maxim. subsp. *sieboldiana* (Maxim) Kitamura) クルミ科

核が検出された。褐灰色。大きさは3cm程度。側面の両側に縫合線が発達する。広卵形で、基部は丸くなっているが先端部は尖る。表面は荒いしわ状となり、縦方向に溝が走っている。内部は子葉が入る２つの大きなくぼみがある。

・サワグルミ（*Pterocarya rhoifolia* Sieb. et Zucc.）クルミ科サワグルミ属

核が検出された。たてにつぶれた球体で、大きさは6mm程度。木質で堅く、内部は子葉が入る2つの大きなくぼみがある。表面は数本の隆起模様がある。

・アカガシ亜属（*Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis* sp.）ブナ科コナラ属

殻斗・果実および葉が検出された。殻斗は大きさ1cm程度。鱗片は癒着して同心円状の輪のように見える。果実は、大きさ1cm程度。卵型で先端部は尖る。基部には、座についていた円形の部分がありざらつく。先端部には輪状の模様がある。葉は断片で接合するかどうかは不明。肉厚で光沢があり、周辺には鋸歯がみられる。

・モモ（*Prunus parsica* Batsch）バラ科サクラ属

核（内果皮）が検出された。褐色～黒褐色。核の形はほぼ円形で、やや偏平である。大きさは直径3cm程度である。丸く大きな臍点がありへこんでいる。一方の側面にのみ、縫合線が顕著に見られる。表面は、不規則な線状のくぼみがあり、全体としてあらいしわ状に見える。

・カラスザンショウ属（*Fagala* sp.）ミカン科

果実が検出された。黒褐色。大きさは4mm程度。楕円形。表面には粗い亀甲状の網目模様が見られる。

・アカメガシワ（*Mallotus japonicus* (Thunb.)Mueller-Arg.）トウダイグサ科アカメガシワ属

種子の破片が検出された。黒色で大きさは2mm程度。表面に小さな瘤状隆起を密布する。種皮は薄く硬い。

・ブドウ属（*Vitis* sp）ブドウ科

種子が検出された。黒色。大きさは4mm程度。腹面には中央に縦筋が走り、その両脇には楕円形に深くくぼんだ穴が存在する。背面には中央に「さじ」状の「へそ」があり、「へそ」回りはくぼんでいる。

・ヤブガラシ（*Cayratia japonica*(Thunb.)Gagn.）　ブドウ科

種子が検出された。黒色で種皮は硬く、大きさは4mm程度。心臓形。先端部はくびれてへこんでいるが、基部は尖る。腹面には中央に縦筋が走り、その両脇には楕円形にくぼんだ穴が存在する。背面には中央に匙状のくぼみが見られる。表面には腹面・背面とも中心から放射状のしわがみられる。

・トチノキ（*Aesculus turbinata* Blume.）　トチノキ科

種皮が検出された。いびつな球形で、大きさは3cm程度。種皮は薄く堅い。表面は黒色、平滑で光沢のある部分と、黒褐色でざらつく部分とがある。

・ミズキ（*Cornus controversa*）　ミズキ科

核の破片が検出された。褐灰色。大きさは4mm程度。縦方向にややつぶれた球形。基部に大きな臍がある。縦方向に走る深い溝が見られる。

・オモダカ科（*Alismataceae* sp.）

種子が検出された。黒色で大きさは2mm程度。U字形で表面には縦長の細胞が密に配列する。

・オオムギ（*Hordeum valgale* L.）　イネ科

穎が検出された。炭化しており、大きさは5mm程度。紡錐形で先端部は尖り、基部は丸い。

・カヤツリグサ科（*Cyperaceae* sp.）

果実が検出された。褐色。大きさは3mm程度。3陵形で先端部はやや尖る。基部もやや尖り「へそ」がある。

・イボクサ（*Aneilema Keisak* Hassk.）　ツユクサ科

種子が検出された。種子は褐色～黒色。楕円形で、大きさは3mm程度。種皮は薄く透き通るものから、やや堅いものまである。側面にはくんぼんだ発芽孔があり、発芽孔の反対側の面には一文字のくぼみがあり、それに直行するしわ模様が存在する。

・カナムグラ（*Humulus scandens* (Lour.)Merrill）　クワ科

種子の破片が検出された。黒褐色で全体の約半分が破損している。大きさは3mm程度。側面の一端に心形の「へそ」が存在する。種皮は薄く光沢がありやや硬い。表面は細かく不規則な凸凹がありざらつく。

・タデ科（*Polygonaceae* sp.）

果実が検出された。大きさは3mm程度。3陵形で、果皮は薄く堅い。表面はざらつく。

・サナエタデ近似種（cf.*Polygonum lapathiflium* L.）　タデ科

果実が検出された。黒色。堅く光沢がある。大きさは2.5mm程度。円形で偏平、先端部と基部は突出する。基部には「へそ」がある。表面は平滑。がくは宿存するが、脈のみが残る。脈の先端部には錨状のトゲを持っている。

・ヒシ属（*Trapa* sp.）

果実の破片が検出された。黒色で光沢がある。果皮は厚く堅い。

・ナス科（*Soranaceae* sp.）

種子が検出された。腎臓形で、側面のくびれた部分に「へそ」があり、表面には「へそ」を中心として同心円状に網目模様が発達する。大きさは3mm程度。褐色。表面は柔らかい。網目模様はやや細かく、畝は波打っている。

・シソ属（*Perilla* sp.）　シソ科

果実が検出された。黒褐色。大きさは1.5mm程度。楕円形で、先端に「へそ」が見られる。表面全体には、荒い亀甲状の網目模様がある。

・メロン類（*Cucumis melo* L.）　ウリ科

種子が検出された。大きさは7mm程度。側面観は長楕円形、上面観はやや偏平な楕円形。表面は比較的平滑。

・ヒョウタン類（*Lagenaria siseraria* Standlay）　ウリ科

種子が検出された。果実片は黒褐色。肉厚で弾力がある。種子は褐色。長さ12mm程度。長楕円形をしており、縦軸方向に深いしわが数本存在する。

・ウリ科（*Cucubitaceae* sp.）

種子が検出された。大きさは7mm程度。側面観は楕円形、上面観はやや偏平な楕円形。

・メナモミ（*Siegesbeckia* sp.）　キク科

果実が検出された。黒色。大きさは2.5mm程度。楕円錐形で先端部が曲が

る。基部には大きな楕円形の「へそ」が存在する。縦軸方向に平行に多数の溝がみられる。

・オナモミ属（*Xanhium* sp.）　キク科

果実が検出された。黒褐色。大きさは8mm程度。楕円形で、表面には突起が多数見られる。

・キク科（*Compositae* sp.）

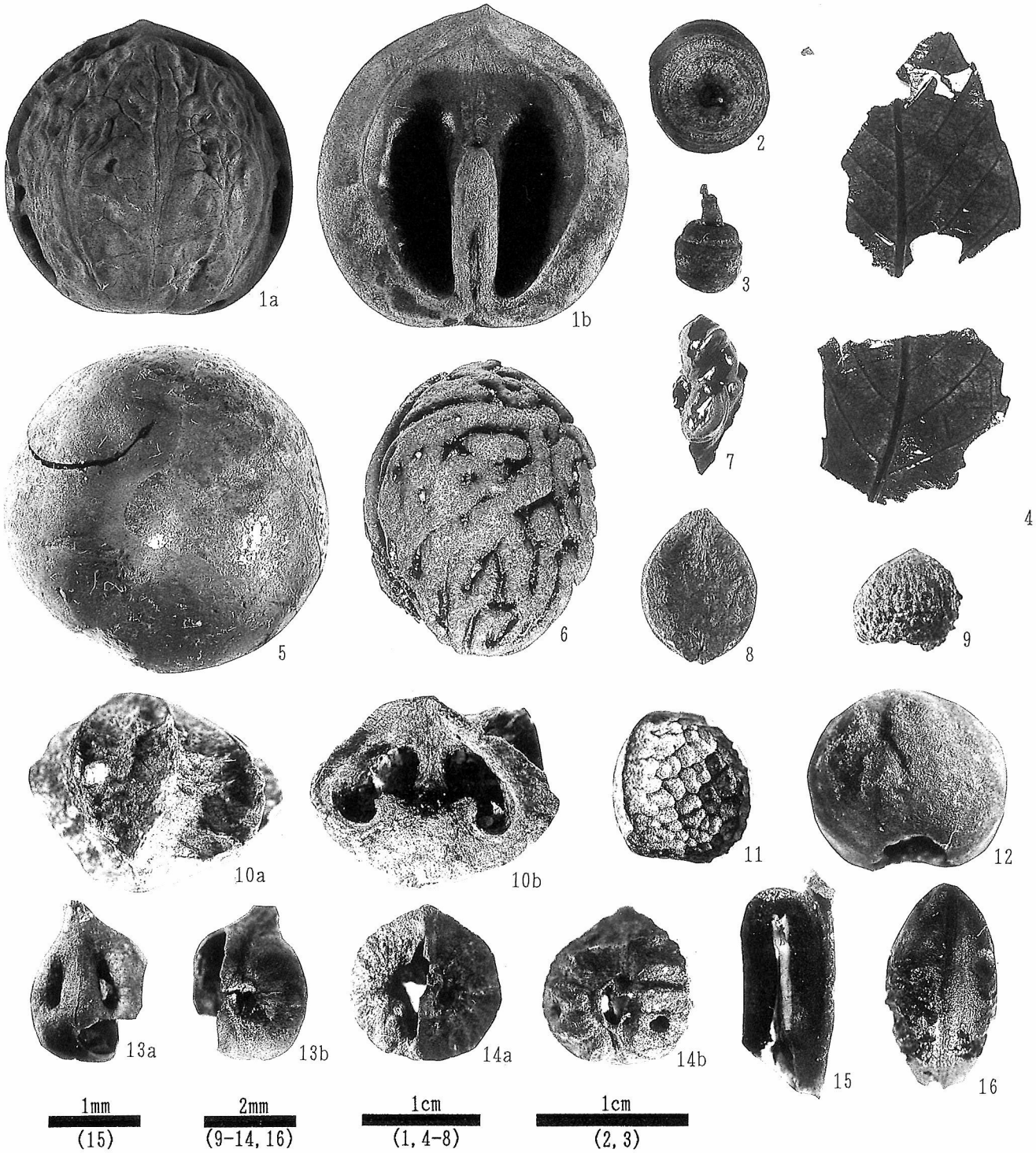
果実が検出された。灰色。大きさは2mm程度。楕円形で、上面観はひし形。

(4) 考察

弥生時代前期～後期の種実は、木本植物のオニグルミ・モモ・トチノキと草本植物のウリ科に同定された。これらの種類はすべて食用もしくは食用となる種を含んでおり、当時も食用として利用されていた可能性がある。

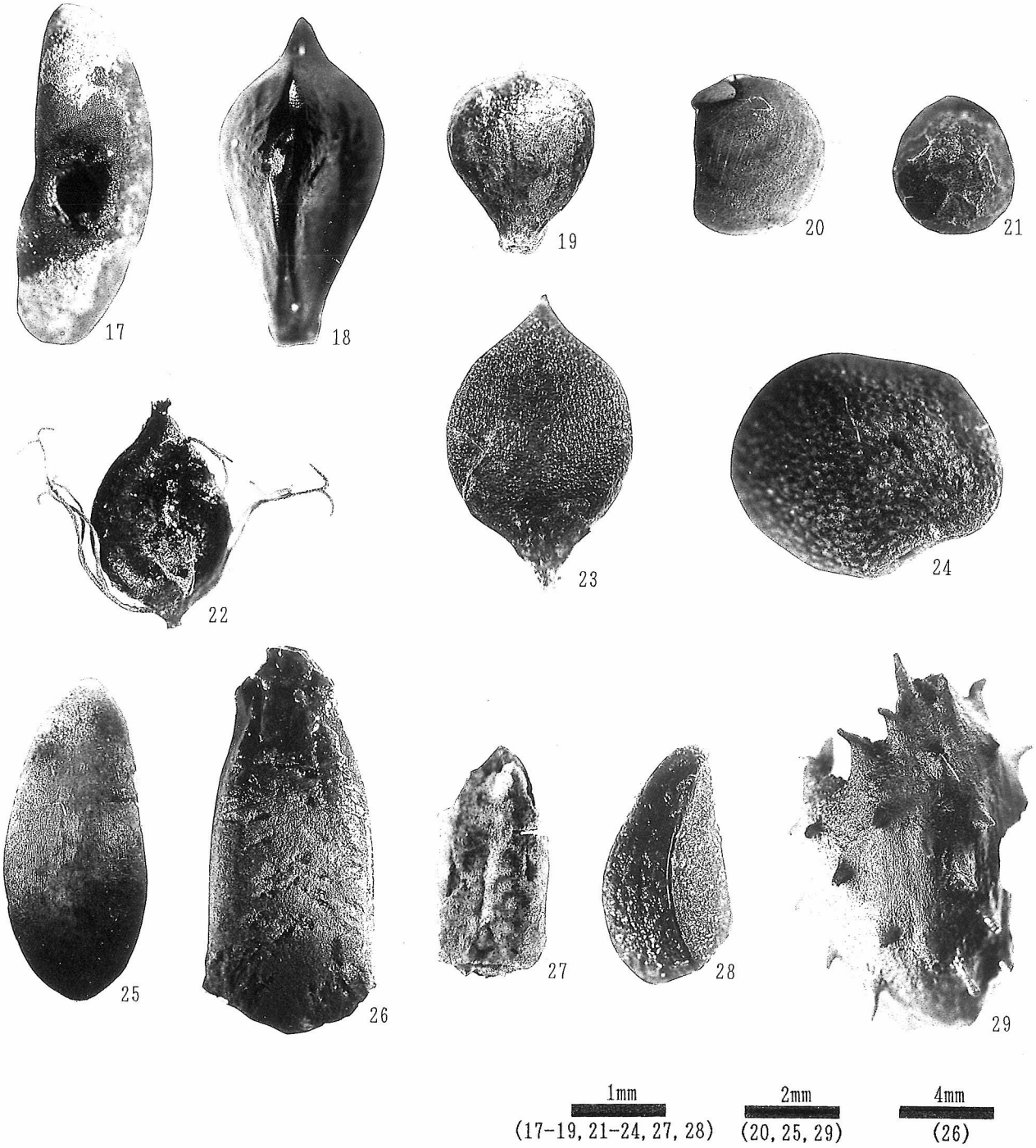
平安時代以降の井戸内堆積物より出土した種実は、草本植物に由来するものが圧倒的に多く、その種類構成は多彩であった。各種類別にみると、オモダカ属・イボクサ・ヒシ属は池沼や湿地などに分布する水生植物の種類であり、前2者は水田雑草の種類でもある。オオムギ・ナス科・ヒシ属・ヤブガラシ・シソ属・メロン類・ヒョウタン類・ウリ科・オナモミ属・メナモミ属・サナエタデ近似種などは、人間の活動と関わりの深い種あるいは種族を含む種類である。多産したタデ科は湿地から荒地まで分布する種を含んでいるが、今回の果実は形態から種を特定することができなかったため、生育地などを特定することはできない。一方、木本植物のうち、モモ・ブドウ属・トチノキは食用あるいは食用となる種を含む種類である。このような井戸内堆積物から出土した種実遺体の種類構成からみて、井戸周辺の植生は多少なりとも人間の干渉の影響を受けていたことが示唆される。また、オオムギ・メロン類などは当時食用として利用されていた植物であった可能性がある。

図版１（１） 種実遺体



1. オニグルミ（試料番号45）
2. コナラ属アカガシ亜属（試料番号32）
3. コナラ属アカガシ亜属（試料番号32）
4. コナラ属アカガシ亜属（試料番号32）
5. トチノキ（試料番号2）
6. モモ（試料番号37）
7. ヒシ属（試料番号1）
8. ウリ科（試料番号39）
9. アカメガシワ（試料番号25）
10. サワグルミ（試料番号32）
11. カラスザンショウ属（試料番号31）
12. ミズキ（試料番号32）
13. ブドウ属（試料番号32）
14. ヤブガラシ（試料番号32）
15. オモダカ科（試料番号25）
16. オオムギ（試料番号27）

図版１（２） 種実遺体



17. イボクサ（試料番号25）
18. カヤツリグサ科（試料番号25）
19. ホタルイ属（試料番号25）
20. カナムグラ（試料番号32）
21. シソ属（試料番号26）
22. サナエタデ近似種（試料番号26）
23. タデ科（試料番号29）
24. ナス科（試料番号25）
25. メロン類（試料番号26）
26. ヒョウタン類（試料番号26）
27. キク科（試料番号29）
28. メナモミ属（試料番号26）
29. オナモミ属（試料番号32）

2. 出土木製品の樹種

(1) 試料

試料は、平安時代以降に埋没した井戸（SE-01）から出土した曲物の側板（No.11）と底板（No.12）である。

(2) 方法

剃刀の刃を用いて、試料の木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の３断面の徒手切片を作製し、ガム・クロラール（抱水クロラール・アラビアゴム粉末・グリセリン・蒸留水の混合液）で封入し、プレパラートを作製する。作製したプレパラートは、生物顕微鏡で木材組織の特徴を観察し、種類を同定する。

(3) 結果

試料は、No.11がヒノキ属に同定されたが、No.12は、切片の作製ができず樹種は不明とした。ヒノキの解剖学的特徴などを以下に記す。

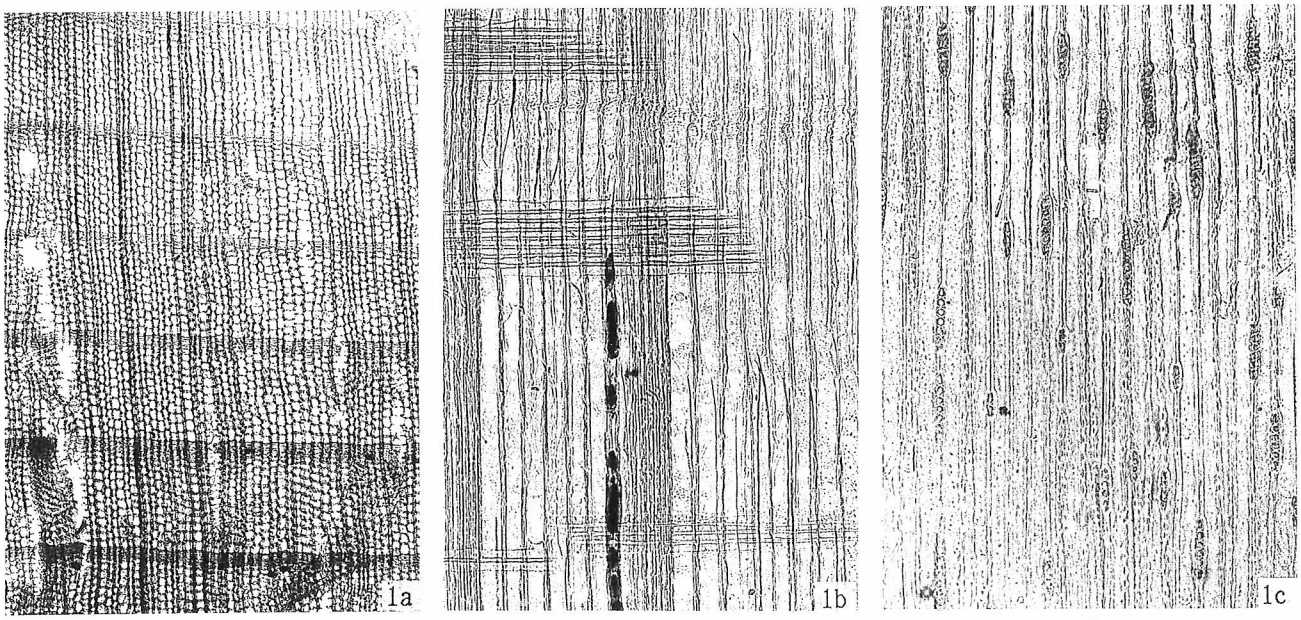
・ヒノキ属（*Chamaecyparis* sp.）　ヒノキ科

早材部から晩材部への移行は緩やか～やや急で、晩材部の幅は狭い。樹脂細胞は晩材部に限って認められる。放射組織は柔細胞のみで構成され、柔細胞壁は滑らか、分野壁孔はヒノキ型で１～４個。放射組織は単列、１～15細胞高。

(4) 考察

試料は、曲物の側板がヒノキ属に同定されたが、底板の樹種は不明であった。曲物は、これまでにも各地で多くの出土例が知られており、その樹種同定が行われた例も増えつつある。樹種同定の結果では、出土した多くがヒノキ属に同定されており、ヒノキ属の木材が地域や植生とは関係なく多用されていたことが推定される。ヒノキ属が多く利用されている背景には、側板のように薄い板への加工が比較的容易であることや、耐水性が高いことなどが考えられる。

図版２　木材



1. ヒノキ属（試料番号11）　a：木口，b：柾目，c：板目

200μm：a
200μm：b, c

6. まとめ

上部の遺構（古墳時代以降）については、トレンチの西半部に残りが良好である。しかし、それ以前の時期については、東半部の残りが良好である。これは、各時期当時の生活面の環境に左右されると考えられる。

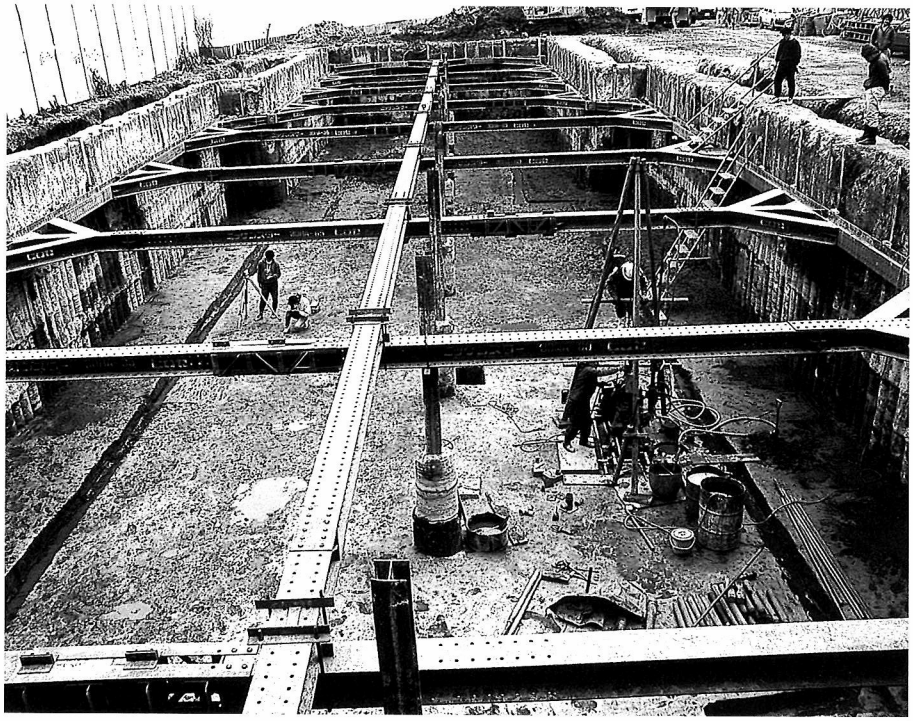
トレンチの中央付近に弥生時代から幾度となく流路として水が流れている。地形的にも、古墳時代以前は、東が高くて安定しており、西側は、水漬かりの状態であったことから、必然的に東側で人々が生活をしていたものと考えられる。

一方古墳時代以降は、古墳時代に中央部分の流路に溜まった土砂によって、自然堤防が形成され、その上に位置する西側が高くなり、東側より安定した土地になったことから人々の生活の場が、西側に移ったものと考えられる。

今回の調査では、足跡などから、人間活動の痕跡は認められたが、建物跡など、それらの人々が生活した集落の発見には至らなかった。

弥生時代中期の遺構が、トレンチの東端部で認められたことから、東側に集落域が広がる可能性を示唆して今回の調査報告に代えたい。

図57　最終掘削底測量風景　西から



7.参考文献

宇野隆夫「井戸考」『史林』第65巻第5号　1982　史学研究会

尾上実・中井貞夫・大谷治孝・奥和之・高橋雅子・瀬川健・安田喜憲・藤原広志・粉川昭平・藤下典之・川村三郎・嶋倉巳三郎・松田隆嗣・安田博之・奥野礼子『若江北-近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書-』1983　大阪府教育委員会・財団法人大阪文化財センター

原田修『若江北遺跡-樟蔭東学園校舎建設に伴う遺跡調査報告-』1985　財団法人東大阪市文化財協会

尾上実・岸本道昭・高橋雅子・三辻利一『巨摩・若江北（その2）-近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書-』1984　大阪府教育委員会・財団法人大阪文化財センター

村上年生・若林邦彦『巨摩・若江北（その3）発掘調査概要-都市計画道路大阪中央環状線仮設迂回路建設工事に伴う巨摩・若江北遺跡埋蔵文化財発掘調査概要報告書-』1993　大阪府教育委員会・財団法人大阪文化財センター

石神幸子・三好孝一・市本芳三・亀井聡『巨摩・若江北遺跡発掘調査報告-第4次-　都市計画道路大阪中央環状線立体交差建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』1995　財団法人大阪文化財センター

村上年生・三好孝一・市本芳三・松田順一郎『東大阪所在巨摩・若江北遺跡発掘調査報告書-第5次-　都市計画道路大阪中央環状線巨摩橋交差点南行車線跨道橋建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』1996　財団法人大阪府文化財調査研究センター

小野久隆「巨摩遺跡」・「若江北遺跡」『河内平野遺跡群の動態Ⅰ　近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書-プロローグ編-』1987　大阪府教育委員会・財団法人大阪文化財センター

岩永省三「銅剣」『弥生文化の研究　6　道具と技術Ⅱ』p.44～p.52　雄山閣1986

池崎智詞「巨摩廃寺遺跡出土の銅剣形石剣について」『東大阪市文化財協会ニュースVOL.6-2』1994　財団法人東大阪市文化財協会

種定淳介「銅剣形石剣試論（上）、（下）」考古学研究　第36巻第4号・第37巻1号　1990

8. 抄録

書名	校舎増築に伴う巨摩廃寺遺跡第６次発掘調査報告書
ふりがな	こうしゃぞうちくにともなうこまはいじいせきだい6じはっくつちょうさほうこくしょ
副書名	
巻次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	池崎智詞、パリノ・サーヴェイ株式会社
編集機関	財団法人東大阪市文化財協会
郵便番号	577-0843
所在地	大阪府東大阪市荒川 2-28-21
電話番号	06-6736-0346
発行機関	財団法人東大阪市文化財協会
発行年月日	2002.3.31
遺跡名	巨摩廃寺遺跡
遺跡名ふりがな	こまはいじ
遺跡所在地	東大阪市若江西新町３丁目
所在地ふりがな	ひがしおおさかしわかえにししんまち３ちょうめ
市町村コード	27227
北緯	34　39　12
東経	135　35　59.3
調査期間	1991.07.20~1992.03.19
調査面積	815m²
調査原因	校舎増築
種別	
主な時代	弥生時代中期から古墳時代初頭・平安時代・近世
特記事項	平安時代の曲物を井戸側に用いた井戸 古墳時代の流路と足跡 弥生時代中期の流路と人間・大型の鳥・肉球を持つ大型獣などの足跡 銅剣型石剣が出土した弥生時代中期の土壙

校舎増築に伴う
巨摩廃寺遺跡第6次発掘調査報告書

2002年3月31日
発行　財団法人　東大阪市文化財協会
〒577-8043　東大阪市荒川3丁目28-21
電話　06-6736-0346
紙質　表紙　レザック215kg・本文　ニューエイジ90Kg
製本　無線綴じ
印刷　㈱近畿印刷センター

巨摩廃寺遺跡第6次発掘調査報告書

二〇〇二年三月　財団法人　東大阪市文化財協会